

# ナイチンゲールから影響を受けた4人の日本人

— その1 石黒忠恵と佐伯理一郎 —

広島文化学園大学看護学部

佐々木 秀 美

**論文要旨** 本論は、ナイチンゲールに面会したとされる石黒忠恵（ただのり）・佐伯理一郎の生涯と明治期医学教育の歴史的経緯の中で概観しつつ、彼らがナイチンゲールから受けた影響について検討を加えたものである。

石黒は、明治維新という騒乱期にあつて、日本の医学の向上と軍医制度の改革と同時に日本赤十字社社長として陸軍に女性による看護を導入した。彼は国際赤十字の基になっているナイチンゲールの人道主義・博愛主義的な考えに影響を受けた日本赤十字社の基本思想とナイチンゲールへの尊敬の念が“ナイチンゲール・石黒記念碑”の贈呈と功勞のあつた看護師たちにその榮譽を与えようとしたことにつながつたと考えられる。

佐伯は、ナイチンゲールの管理能力と科学的な看護について強い関心を抱くと同時に、京都看病婦学校の運営・管理に参画しつつ、彼女のキリスト教的愛の精神を看護教育に生かそうとした。しかしながら、佐伯は医学にとって看護の重要性とその活動の有効性を認めていたであろうが、学問としての未成熟な段階にあつて看護学の独自性とその専門領域としての賢察までには届き得なかつた。両者ともに明治維新の波濤の時代にあつて医師として、日本の医学の向上の中で、看護を必要不可欠なものとして考え、看護教育の発展に尽力したことは紛れもない事実である。ナイチンゲールからの影響という点において彼らが、それぞれの生涯のある一地点において、医師として己が感じる意思のままに、自己の理想を貫きとおした人物たちであつたということであろう。

**キーワード：**ナイチンゲール、石黒忠恵、佐伯理一郎、医学教育、看護教育

## ■ はじめに

我が国における看護教育の胎動は明治期初期に起きており、既に『歴史に見るわが国の看護教育—その光と影—』<sup>1)</sup>や『ナイチンゲール方式による看護教育の特徴とその拡がり—教育の創造と伝承—』<sup>2)</sup>でも報告したとおりである。わが国はナイチンゲールから多くの遺産を受け継いだ。それは単にナイチンゲール方式を導入して看護教育を開始したにとどまらない。

杉田暉道他著の『看護史』<sup>3)</sup>にはナイチンゲールに面会できた人物として石黒忠恵（ただのり）・佐伯理一郎・津田梅子・安井てつの4名の名前が記述されている。彼らは、江戸時代末期から明治維新に至る過程、あるいは明治維新以降の政情不

安定な中で、時代を読み取り、それぞれの人生をたくましく生き抜いた我が国のオピニオン・リーダー的な人物たちである。石黒、佐伯の両名は医師であり、看護教育に関わつた人物として、又、梅子、てつの両名はわが国女子教育のパイオニアとしてそれぞれ先進的な役割をなした。

1868年（明治元年）、天皇を擁して明治維新を果たした新政府は、江藤新平<sup>4)</sup>、大久保利通<sup>5)</sup>、木戸孝允<sup>6)</sup>らを中心に、岩倉具視<sup>7)</sup>を主権として教育政策を開始した。1871年（明治4年）には文部省が創設され、初代文部大臣に大木喬任<sup>8)</sup>が就任した。このとき設置された文部省の機能は学校教育の全てを管理監督するものであつた。彼等は1872年（明治5年）、国民の教育の機会均等に立脚する“学制”<sup>9)</sup>を發布した。“学制”を実施する

に当たって、“身を立て名を挙げ”といった大政官の布告<sup>10)</sup>は市民平等、男女平等に基づくものであり、西洋の教育思想に立脚したものであった。“学制”は又、立身出世の気概を国民に持たせる事によって、沈滞した日本の状況を打破しようと目ろんだものでもあった。そうした政治的状況下で、板垣退助<sup>11)</sup>を始めとする自由民権運動の高まり、他方においては国学者を始めとする儒教主義思想との思想的対立は、明治政府をして脅威と感じさせるものであった。その為、彼らの政治的関心は急激にドイツに向いた。明治政府は英米思想からの脱却を図ると同時に、1889年（明治22年）、ドイツ憲法に倣った“大日本帝国憲法”を發布、1890年（明治23年）には“教育勅語”を發布し、江戸時代から培われた儒教主義思想をもって国民の思想統一を図ろうとした。

そして、医学教育は“学制”發布後に発展した。“医制”は長与専斎<sup>12)</sup>によって立案され、実施に移されたわが国最初の医療・衛生制度である。“医制”發布前の1869年（明治2年）には、医学教育建白書が土岐源頼徳<sup>13)</sup>、石黒伴忠恵<sup>14)</sup>、長谷川平泰<sup>15)</sup>の3名によって提出され、大きく前進した。

わが国の女子教育政策に目を向けると、“学制”における教育方針は男女共学が大前提であったが、その後、大きな思想的・政治的転換が迫られた。それは、江戸時代からの、“三従の教え”“男女7歳にして席をおなじゅうせず”“女に学問はいらぬ”等の儒教主義思想が国民に浸透していたことと同時に、維新後の経済的困窮の状態などが複雑に相俟ってのことであった。

女子教育政策が暗礁に乗り上げたころ、西欧諸国で開始されたナイチンゲール方式による看護教育もわが国に導入された。しかしながら、その教育は、国民の教育の機会均等に立脚した“学制”の教育政策の中ではなく、病院付属の看護婦養成所であった。『歴史に見るわが国の看護教育—その光と影—』でも報告したように、その教育の提唱はアメリカミッシンの女性宣教師達であり、ついで、婦人慈善会<sup>16)</sup>のメンバーからの“看護婦教育所設立の主旨”によってである。彼女たちの申し出により、看護教育を開始したのは、イギリス留学から帰国し、東京府病院の一部を借用して民間病院である有志共立東京病院で施療にあたっていた高木兼寛<sup>17)</sup>である。彼は、1885年（明治18年）に有志共立東京病院看護婦教育所を設置し、ナイチンゲール式看護教育法によって看護教

育を開始した。しかしながら、わが国独特の文化的・思想的背景の影響下で看護教育は、国家主義教育の中で、時代の必要性から推進された。筆者が「国定教科書におけるナイチンゲールの取り扱いに関する若干の考察」<sup>18)</sup>で論じたように、わが国は熱狂的にナイチンゲールを受け入れ、彼女から多くのものを学んだ。がしかし、看護教育に関して論じれば、当時の国策の中で都合の良い点のみが取り上げられたことも事実であろう。

ナイチンゲールに面会したとされる石黒忠恵・佐伯理一郎・津田梅子・安井てつの4人が、明治維新以降の激動の時代にあって、その生涯の一部分でナイチンゲールと面会してどのように影響を受け、それぞれの人生の意志決定に影響を与えたのか非常に興味深い点である。そこで、津田梅子・安井てつについては次稿に譲り、本論ではまず、医師であり、看護教育に携わった石黒忠恵・佐伯理一郎の生涯について医学教育の歴史検証も含め、彼らがナイチンゲールから受けた影響について論じる。

## ■ 維新前後の医学教育

わが国の医学教育は、儒学医からオランダ医学、さらには英米医学からドイツ医学へと変遷した。杉田暉道他著の『看護史』には、わが国の近世医学の歴史をかざるにふさわしい医学者として、桃山時代の曲直瀬道三（まなせどうさん）<sup>19)</sup>を掲げている。道三は中国の医書を研究し、多くの難病を治療し救ってきた。しかし、彼は権威のある医学書のないことを憂いて『啓迪集』<sup>20)</sup>を著した。『啓迪集』の内容は「諸家が最も大切ななめとしたものを広く集め、これに力をつくして意をきわめた。」<sup>21)</sup>と書かれており、数十年の月日を使って纏め上げたものである。『啓迪集』の由来は彼の子孫を教え導くため（啓迪）のものであり、その根本精神は“医は仁術”という儒教精神による医師の理念である。彼の子孫は豊臣・徳川時代に重用され、医事を司る長官になるなど、300年間にわたって重んじられた。

杉田玄白<sup>22)</sup>は真の医学は西洋を模範としなければならぬと考えた。八代将軍吉宗は鎖国時代にも関わらず蘭学書の輸入を解禁した。玄白は独学でオランダの解剖書を訳し、『解体新書』を1774年（安永3年）に著した。本書の出現によって、西洋医学の実験的実証性の認識が広まり、オ

ランダ医学書の翻訳が活発になり、西洋文化が広く受け入れられるようになった。

緒方洪庵<sup>23)</sup>は幕末における日本のオランダ医学者の第一人者である。洪庵は、長崎の出島でオランダ人医師、ヨハネス・ニーマン<sup>24)</sup>のもとで医学・医術を究め、1838年(天保9年)に大阪に帰った。帰阪後、適塾という蘭学塾を開いた。1862年(文久2年)、幕府の強い要望で奥医師兼西洋医学頭取として、江戸に赴くまでの20年間、日本最初の病理学書『病学通論』、コレラの病理・治療・予防書である『虎狼痢治準』などを著したほか、道修町に除痘館を設けて種痘事業の発展に尽くした。その門下生には福沢諭吉<sup>25)</sup>、大村益次郎<sup>26)</sup>、佐野常民<sup>27)</sup>、長与専斎など、わが国の近代化に貢献した傑出した人物がいた。

長崎養生所は江戸幕府によって設立されたわが国最初の西洋式の病院である。この養生所は1857年(安政4年)江戸幕府に招かれて、長崎の海軍伝習所医官として来日したオランダ人軍医ボンペ・フォン・メールデルフォルト<sup>28)</sup>の要請によって設立された。1860年(万延1年)に設立が認可され、1861年(万延2年)開校に至った。ここまでの教育は実質的には医師の下で働きながら学ぶ“見習い制度”である。

本格的な医学教育が導入されたのは明治維新以降であるが、1887年(明治20年)には、近代西洋医学の基礎が帝国大学を中心にできた。帝国大学は、1790年(寛政2年)に江戸幕府の学問所として建てられた昌平坂学問所、1863年(文久3年)に洋学者を採用して洋学の翻訳の仕事を主に行う目的で建てられた開成学校、1858年(安政5年)に設立された神田お玉が池の種痘所が、1860年(万延元年)に幕府の直轄なり、この種痘所(後に医学所と改称)の3校が、1869年(明治2年)に合併してできた大学である。1872年(明治5年)に“学制”が發布され、1877年(明治10年)に3校が合併してできた大学は、文部省直轄となり、東京大学と改称した。1886年(明治19年)、“帝国大学令”が發布され、東京大学は帝国大学となった。

まず、医学所時代の最初の長官は伊東玄木<sup>29)</sup>、次は緒方洪庵、そして次は松本良順<sup>30)</sup>であった。1865年(慶応元年)、医学の道を究めたいと考えた石黒が入学したのは、神田お玉が池の医学所であり、松本の長官時代であった。この頃の医学所の教育内容は、内科学・薬理学・生理学・解剖学・蘭学・理化学であったと石黒は証言する。こ

の医学所に大病院を付属させ、医学専門の大学東校とすることが、岩佐純<sup>31)</sup>、相良知安<sup>32)</sup>によって提言され、前者2校は大学南校と称された。大学東校開設当時の長官は石神良策<sup>33)</sup>であり、実地医療はイギリスのウィリアム・ウィリス<sup>34)</sup>が主担当であった。1869年(明治2年)1月、ウィリスは大病院の院長に就任、診療の傍ら学生に講義を行った。当時、長官は別当と呼ばれたが、現在の文部大臣にあたる最初の職に土佐の山内容堂<sup>35)</sup>が着任し、ついで松平春嶽<sup>36)</sup>がその任についた。

1869年(明治2年)、江戸に戻り、大学東校の職員となった石黒は“医学教育建白書”を土岐、長谷川らと連名で提出した。それには「恭しく惟みるに聖廟深く医教の地に墜るを憂へ新に医校を開き大に海内の英俊を抜んで遠く欧州の哲士を招き以て済々たる多士を育するは蓋し皇国の医教をして海外万国の上に擢んで皇国の生霊をして海外万国より壽考ならしめんと欲するにあり」<sup>37)</sup>と書かれている。彼らは日本の医学水準を上げるためには、新たな医学教育の場の開設及び、その教育に適切な人材を外国から雇用し、しかるべき教育をする必要性があるとの提言だ。

提出された“医学教育建白書”を重要視した新政府は、ドイツ医学採用を進言した相良知安、グイド・ヘルマン・フリドリッヒ・フェルベック(通称フルベッキ)<sup>38)</sup>の提言を参考に、最も進んでいると判断されたドイツ医学を採用することにした。以降、日本政府の求めに応じてベンジャミン・カール・ミュルレル教授<sup>39)</sup>、テオドール・エドワルド・ホフマン教授<sup>40)</sup>、エルビン・フォン・ベルツ教授<sup>41)</sup>、ジュリアス・カール・スクリバ教授<sup>42)</sup>などが来日した。彼らは帝国大学医学部におけるドイツ医学の基礎を築いたばかりでなく、日本の医学の発展に貢献した。

ドイツ医学採用にあたって生じた問題はウィリスの処遇であった。ウィリスは先述した大病院が、江戸幕府時代の医学所と合併して医学校兼大病院となった1869年(明治2年)に、院長に就任した。彼は診療の傍ら学生に講義を行った。院長以前のウィリスの野戦病院における診療の評価はすこぶる良好であったが、将来の日本の医学界を引っ張って行く指導者としての手腕には疑念の声が高く、新政府はドイツ医学を採用する事を決定し、彼の職を解いた。その後、ウィリスは、親交が厚かった西郷隆盛<sup>43)</sup>によって、1869年(明治2年)、薩摩藩が建てた医学所(現在の鹿児島大学医学部)



に誘致され、薩摩に赴いた。

ちなみに、薩摩藩が建てた医学所（現在の鹿児島大学医学部）でウィリスから医学教育を受けたのは先述した高木兼寛である。『高木兼寛伝』<sup>44)45)</sup>によれば、彼は宮崎県の下級武士出身であったが、医学を志し、医師になった。しかし、戊辰戦争の際に、医師として参戦し、自身の医師としての力量不足を悟り、医学の再教育を決意した。薩摩に医学所が設立されることを知った高木は、ウィリスが、鹿児島医学校の校長に就任後、1869年（明治2年）、同医学校の第一期生として入学した。彼はウィリスに師事した後の1873年（明治6年）、海軍病院内に海軍医学校が新設されたのを契機に鹿児島から東京に招集された。当時、東京の海軍医学校には、イギリスの聖トマス病院医学校の出身者であったウィリアム・アンダーソン<sup>46)</sup>が教授として招かれていた。アンダーソンの推薦によって高木は1875年（明治8年）、聖トマス病院医学校へ留学し、英米思想による臨床医学を学びつつ、ナイチンゲールが開始した看護教育にも触れた。帰国後高木は、ウィリスやアンダーソン、ジェームズ・カーティス・ヘボン<sup>47)</sup>らと共に成医会講習所（現在の慈恵医科大学）を設立し、後に大学教育まで発展させた。

1871年（明治4年）、岩倉使節団と行動を共にし、欧米各地の医療制度を視察した長与はサニタリーやヘルスの言葉と共に国民の健康保護に関する行政組織の存在を発見した。彼らが渡米した頃の欧米医学も今日ほど進んでいたわけではなかったが、医師達の組織が結成され、多くの研究業績が報告され始めた頃であった。例えば、1832年（天保3年）、イギリス医師会が設立され、1841年（天保12年）にアメリカ医師会が設立されている。ルイ・パスツール<sup>48)</sup>は狂犬病に関する研究を行い、犬の予防接種を行うことによって狂犬病を減少させた。ロード・ジョセフ・リスター<sup>49)</sup>は病気の細菌説を外科領域に応用した。ドイツのロベルト・コッホ<sup>50)</sup>は細菌学の基礎を築いた。1874年（明治7年）にはアーマウアー・ハンセン<sup>51)</sup>が癩菌を分離した。少なくとも、使節団に同行した長与は諸外国の医療の現状から、日本での医学教育の質的向上を図らなければ、国民の健康を守ることはできないと考えたのであろう。

国民の健康保持実現のための本源は、医学教育にあると考えた長与は、1873年（明治6年）、全文七十六ヶ条からなる医制の成案を文部省経由で

太政官に上申した。彼の上申によって医制の成案がなされた結果、1874年（明治7年），“医制”が文部省によって発令された。『医制百年史』<sup>52)</sup>によれば“医制”には、衛生行政の目的及び機構、医学教育、病院、医師、産婆、針灸業者、薬事などに関することが規定されている。衛生行政の目的及び機構には、まず、第一に医政は、国民の健康を保護し疾病を治療し、医学を興隆するための事務とすると述べられ、行政機関として文部省医務局に医監、副医監を置き、その統括の下に全国を七区に分かつてそれぞれに衛生局を設ける、としている。この時代から医師の役割が人々の健康を守るためのものであると明確に打ち出された。

“学制”における大学教育の目的は、高尚の諸学を教える専門科の学校と規定されており、その学科は理学・文学・法学・医学の四学科である。医学については、各大学区に医学校一所を置き病院を付属させるとしている。大学区というのは先述した“学制”における行政組織であり、全国に8つの大学区（1873年《明治6年》には7学区に減）を置いた。つまり、この時点で医学校を7－8校設立する予定であったといえる。“学制”時代の入学資格は14歳以上で18歳以下の小学校卒業生であり、教育期間は予科三年、本科五年の計八年である。本科の科目は解剖学、生理学、病理学、内科、外科及び公法医学（裁判医学及び護健法）となっている。又、病院長は医師の免許状を有するものでなければならぬと規定され、産婆に関してはその業務制限と免許に関する規定がなされた。医学教育は“学制”の高等教育制度を存分に活用した教育であり、現在、国立第一期と言われる京都大学、大阪大学、九州大学、東北大学などがこの計画で設立された。以上のように、明治に創設された東京大学は、わが国の教育機関の最高峰としてあらゆる分野のパイオニア養成を目指してきた。しかし、この時期、東京大学医学部で学べる医学生は少数で、医学を学ぶ者の大半は実際、医業を実施している医師の側で手ほどきを受ける、徒弟制度的な“見習い制度”が継続した。

## ■ 石黒忠恵

### 1. 石黒忠恵の生涯

石黒は兵部省の松本良順の元で軍医制度確立に尽力した人物として知られる。日本が儒教主義国家を形成し、自国のアイデンティティ確立と共に、

軍国主義に傾倒していく中で、陸軍における傷病兵の看護に女性を導入した最初の人物として特記される人物でもある。先述したように、明治維新以降の医学教育の歴史から考えた場合、その発展には石黒も大きく関与している。医学の水準を高めるための医学教育建白書の提出は、近代西洋医学の基礎固めになったであろう。以下に述べる石黒の生涯については、大空社出版の『懐旧九十年』<sup>53)</sup>と岩波出版の『懐旧90年』<sup>54)</sup>を参考にした。

石黒は1845年（弘化2年）、奥州（福島県）手代の平野順作良忠の子として生まれた。3歳のときに父親が甲州勤務となり、1850年（嘉永3年）には甲府の陣屋に転勤になった。甲府では罪人の取調べや拷問、入れ墨の刑を見たりした。1853年（嘉永6年）、9歳のときに父親が江戸詰めになって浅草に居を構えた。1855年（安政2年）江戸に大地震が起きた年、父親が死亡した。臨終の際、父親が苦しい息の中で「汝は勉強して身を立て家名を挙げ母上に孝行せよ」<sup>55)</sup>と言った。1856年（安政3年）、12歳の年、浅草から湯島に引越し、元服した。1857年（安政4年）からは、専ら剣術と学問を学んだ。1858年（安政5年）母親が死亡、天涯孤独の身となった。父親の姉が石黒家に嫁いでいたが、子がいなかったために家系をついで欲しいとの願いがあり、これを承諾した。越後に一家をかまえた石黒は、1859年（安政6年）江戸に向かう途中、勤皇家である大島誠夫という人物に出あった。彼は「皇政を復興し、封建制度を廃して、六十余州を皇室の下に統一し、士気を作興しなくてはならぬ」<sup>56)</sup>と述べていた。大島から京都のことを聞いた石黒は京都に入った。1863年（文久3年）佐久間象山<sup>57)</sup>を訪問し、尊王論や攘夷論について学んだ。

1864年（文久4年→元治元年）蘭方医柳見仙に師事し、医学を学び始め、1865年（慶応元年）には、神田お玉が池の医学所に入学した（先述した東京大学の前身）。石黒が入学した頃は松本良順が頭取であった。そこで内科学・薬剤学・生理学・解剖学・蘭学・理化学などを学んだ。幕末が近づき、15代将軍徳川慶喜が江戸に逃げ帰り、医学所も解体された為、越後に帰った。

戦争が終結した1869年（明治2年）、再び江戸に戻ると、医学所は官軍の病院になっていた。当時の長官は石神良策、実地医療はイギリスのウィリスであった。この医学所に大病院を付属させ、医学専門の大学東校とすることが、岩佐、相良に

よって提言された。1869年（明治2年）、石黒は大学東校の職員となった。当時、長官は別当とも呼ばれたが、現在の文部大臣にあたるその職に土佐の山内容堂が着任し、ついで松平春嶽がその任についた。同年、明治政府に対して石黒は医学教育建白書を土岐、長谷川兩名と共に連名で提出した。相良の提言などもあって明治政府は、フルベッキの提言を参考に、最も進んでいると判断されたドイツ医学を採用することにした。ウィリスの職については西郷が協力した。このあたりのいきさつについては石黒自身も証言しているが、『高木兼寛伝』<sup>58)59)</sup>にも言及されている。

1871年（明治4年）、日本政府は第一回国費留学生を各分野から選出することになった際、石黒にもドイツ留学の話が起きたがこれを辞退した。その後、大学が文部省となり、最初の文部卿であった江藤新平から大木喬任に変わった。1871年（明治4年）、石黒は文部卿が差し向けた一等書記官と大学の調査のことで論争になり、文部省を罷免され、兵部省に転じた。兵部省では松本良順の元で軍医制度の完成に尽力した。

1876年（明治9年）、石黒はフィラデルフィアの万国博覧会視察の命を受けてアメリカに渡った。当時、派遣の命を受けたのは陸軍関係者であったが、内務省から長与衛生局長、文部省から三宅秀<sup>60)</sup>が同船した。石黒は軍事衛生について視察する予定であった。1877年（明治10年）には征韓論問題で西南の役が勃発した。石黒は大阪臨時病院長に就任したが、日本屈指の外科医と評された佐藤尚中<sup>61)</sup>、橋本日本赤十字社病院長が着任するとすぐさま副院長として協力した。

1879年（明治12年）東京大学医学部総理心得となった。女子教育が後退しつつあったこの頃、永井久一郎<sup>62)</sup>の添え書きを持って荻野吟子<sup>63)</sup>が、医学を学びたいと申ししてきた。荻野は「願書は再び呈して再び却下されたり、思うに予生てより、かくの如く窮せしことはあらざりき。」<sup>64)</sup>と述べている。荻野が経験した様に、女性が男性の組織に食い込むことは大変に難儀な時代であった。石黒は、内務省の長与局長始め関係者と議論および懇願をした<sup>65)</sup>と述べている。願書が受理され、受験の結果、1884年（明治17年）、女医として始めて荻野が医師試験に合格した。その翌年の1885年（明治18年）に前期・後期試験に及第し、開業免許状を得て、本郷に開業した<sup>66)</sup>。わが国初の女医の誕生であった。



1882年（明治15年）石黒は、日本赤十字社常議員となった。石黒が限りなく支援した日本赤十字社は、オーストラリア公使であった佐野と小松宮彰仁親王<sup>67)</sup>によって創設されたものである。日本赤十字社設立について小松宮親王は「余の生涯に於て本務なる陸軍々務を除き一般の事に於て、功績の残るべき此の赤十字事業なりと思うてゐる」<sup>68)</sup>と述べたと石黒は証言する。

1885年（明治18年）内務省衛生部長になった石黒は、内務省の長与衛生局長を補佐した。1886年（明治19年）、陸軍省医務局次長となった。1887年（明治20年）には欧州に派遣され、バーデン・カルルスルーエ万国赤十字第4回総会に参列した。ドイツではコッホと話す機会が得られた。この当時、北里柴三郎<sup>69)</sup>がコッホに師事していた。医学者では、バイエルン国の軍医総監フォン・ローツベックやザクセン国の軍医総監ロート・ルドルフ・ウィルヒョウ<sup>70)</sup>などに出会った。ドイツでは先に留学していた佐伯とも会っている。『佐伯理一郎日記』<sup>71)</sup>には、1888年（明治21年）5月に石黒が来独したと記載されている。

石黒が軍医総監、陸軍省医務局長に就任した1890年（明治23年）、日本赤十字社看護婦養成所が設立された。1894年（明治27年）に日清戦争が勃発すると石黒は、野戦衛生長官、大元帥陛下と共に広島に赴いた。この日清戦争の際に、日本赤十字社看護婦養成所卒業の看護婦を広島の予備病院につけた。陸軍に女性の看護者を導入するに当たっては、関係者および兵隊から反対が多かったが、石黒は「この看護婦のなかには、樺山軍令部長夫人、仁令海軍中将夫人もおられ、そのほか陸海軍の将官、佐官の夫人、令嬢も混じっておられるから、看護婦に無礼をすると、思わず各自の長官の家族に無礼をすることとなるから、念の為注意しておく。」<sup>72)</sup>と勧告した。この勧告は規律と命令で統括されていた当時の軍部関係者を、沈黙させるには十分だったようである。看護婦養成所発足に先だって、1887年（明治20年）には大山捨松<sup>73)</sup>ら有志の貴婦人たちによる篤志看護婦人会が組織されていた。彼女らは自ら看護の学術を学び看護婦養成に尽力した。皇族夫人達も含めた上流夫人達の模範により、“こうした方々も行う看護”というイメージ付けが好結果に繋がり、看護婦志願者が続出した。戦後は、石黒の力添えにより民間で初めて日赤看護婦たちに勲章が与えられた<sup>74)</sup>。

1895年（明治28年）、石黒は男爵の爵位を授与され、華族に序せられた。1897年（明治30年）には新官制が敷かれ、あらためて軍医総監になった。1902年（明治35年）の桂太郎<sup>75)</sup>内閣のときに貴族院議員に選出された。1904年（明治37年）、日露戦争時には軍医と看護婦養成所卒業の看護婦が良い働きをした<sup>76)</sup>と述べている。1910年（明治43年）にナイチンゲールが没したとき石黒は、ナイチンゲール・石黒記念碑と基金を日本赤十字社に寄付し、毎年、優れた看護婦に贈ることにした。1920年（大正9年）枢密院顧問官に任ぜられ、1941年（昭和16年）天寿を全うした。石黒の生涯は、軍医制度の確立と陸軍医療制度の整備にあった。その間に日本赤十字社社長の時代があり、看護婦学校の仕事などが含まれた。

ところで、石黒の生涯において、彼が海外に出たのは、1876年（明治9年）と、1887年（明治20年）である。『佐伯理一郎留学日記』によれば、それは1888年（明治21年）5月のことである。しかしながら、石黒の生涯史に見る限り、ナイチンゲールに会ったとの事実発見には至っていない。

## 2. 国際赤十字と日本赤十字社の設立

戦争では多くの者が傷つき倒れる。国際赤十字の設立も戦時中の救護活動を主眼としていた。日本赤十字社設立は、世界赤十字との関連においてその趣旨は人道主義的ではなかったとはいえないが、歴史上、世界赤十字の設立経緯も戦争とは無関係でなかった。国際赤十字（The International Red Cross）はイタリアのソルフェリーノの戦いにおいて、その傷病者の悲惨さを目撃したアンリ・デュナン<sup>77)</sup>の提唱によって設立されたものである。彼の著『ソルフェリーノの記念』には“かくして戦争は始まった”という書き出しに始まり、「鋭い痛みを襲われ、筆舌に尽くし難い乾きの責め苦を受ける多数の負傷兵の胸から、悲痛なまでの呻き声、哀願の声が漏れる」<sup>78)</sup>と記述され、累々たる死傷者の群れ、各地で展開された救護活動、望まれる国際的救護の団体と規約と締め括って、そのなかにナイチンゲールの救護活動を紹介している。

クリミア戦争におけるナイチンゲールの人道主義的な働きが世界赤十字設立に向けさせたという点で、ナイチンゲールはこの組織の功労者として見られる。しかし、ナイチンゲールは当初、この組織の設立に諸手をあげて賛同してはいなかった

ようである。既に『ナイチンゲールイギリス陸軍を改革する一学習（経験）したことから学習せよ』<sup>79)</sup>でも報告したように、ナイチンゲールがクリミアから帰国して、まず先に行ったのは英国陸軍の改革であった。この一貫として行われたのが陸軍医学校の設立である。この医学校の初代外科教授であったトーマス・ロングモア博士<sup>80)</sup>はジュネーブ国際会議の代表者に選ばれている。彼はこの会議の事に関してナイチンゲールに報告し、助言を求めた。ナイチンゲールは「戦争のかけらもないようなジュネーブというような小さな国で、そのような事が論議されようとしていることが非常に不条理であるという事は、改めて言うまでもないでしょう。」<sup>81)</sup>と彼等が話し合っている医療活動の中立制度、および国際的組織における篤志看護婦の配置に関する議題に関心を示そうとしなかった。又、「政府が立場上署名をするということは、政府にとって大した害にはならないということは、私には分ります。」<sup>82)</sup>と述べ、こうした前持った契約があるからといって、戦争状態がなくなるわけでもなく、実際には強い国の軍隊が多くの人間を殺せば殺すほど良いという、異常事態が起きるのが常であると述べている。

しかし、ナイチンゲールは、1864年（万延4年）にジュネーブで開催された国際会議に、英国代表として参加するロングモア博士とラザフォード博士（Rutherford, Dr）から、会議に提出する提案の草稿を依頼され、不承不承これを作成した。ジュネーブ国際会議で彼らは、ナイチンゲールの草案をもとに会議を開き、赤十字委員会の発足とジュネーブ協定を方向づけた。デュナンは1872年（明治5年）に英国を訪れた際に「私は赤十字の創立者、ジュネーブ協定の創設者と呼ばれていますが、あの協定の成立は、まったく英国の一人に負うているのであります。そもそも、あの1859年の戦争の最中に、私をイタリアへ赴かせたもの、それはクリミアにおけるナイチンゲール女史の働きだったのです。」<sup>83)</sup>と述べ、国際赤十字がナイチンゲールの熱心な援助によって結成されたものであると紹介している。こうした言葉を裏付けるかのように国際赤十字は、ナイチンゲールの死後、彼女の影響力を考慮して“ナイチンゲール記章”を制定し、看護に従事して人道的な功勞のあった人を表彰している。

そうした、国際赤十字の設立に真っ先に呼応した日本人は、オーストラリア公使であった佐野常

綱であった。彼は、1873年（明治6年）にウィーン万国博覧会に新政府の代表として参加した際に、日本にも赤十字社設立の必要を感じた。江戸末期から明治維新以降、わが国は新しい武器による攻防が激しくなり、多くの犠牲者がでていた。佐野は元老院議長であった1877年（明治10年）に博愛社を設立し、その社長になった。目的は戦時中の救護活動のためであったが、日本国内での騒乱が沈静したために、貧民の施療等を行っていたのである。1878年（明治11年）の新聞報道には「今度同会の幹事諸氏の発言にて一入社務を拡張し、欧米各国の同社に倣い、戦時は勿論、無事の時も夫々準備し、貧民施療等を広く設けんと、此度、会員一同築地の精養軒に会して協議をとげたるよし。」<sup>84)</sup>と書かれている。つまり、博愛社は戦時中の負傷者の救護活動を目的に設立されたのである。

1885年（明治18年）、大山巖<sup>85)</sup>陸軍卿と共に欧州視察旅行より帰国した橋本綱常<sup>86)</sup>陸軍軍医総監は、国際赤十字設立という諸外国の活動に心を動かされた。そこで彼は赤十字に関する報告と共にジュネーブ条約加盟の必要性を、佐野と共に明治天皇に伸上した。翌、1886年（明治19年）には、博愛社病院が設立された。この病院の院則には「院則ハ第一軍隊ノ負傷者を救護スベキ看護者ヲ養成シ第二戦時ハ本院ヲ以テ負傷者ノ予備病院ニ供シ第三平時ハ民間ノ病者ヲ治療シ以テ看護人ヲシテ実地ノ研究ヲナサシム」<sup>87)</sup>と規定されている。この規則から考えると博愛社病院設立の目的は、第一に看護婦の養成目的の病院であるという事、第二に戦時中の負傷兵を収容し、施療する事、第三に平時には一般の患者の施療である事などであり、医療行為を通じて研究等の教育機関とすることが明確にされている。1887年（明治20年）5月に日本赤十字社の社長になった佐野は、同年、10月には社長の椅子を松方正義<sup>88)</sup>に譲り、1888年（明治21年）にかねてから計画中であった看護婦学校設立を本格化させた。

### 3. 日本赤十字社看護婦養成所設立と石黒忠恵

日本赤十字社看護婦養成所については、『日赤の創始者 佐野常民』<sup>89)</sup>、『日本赤十字社史續稿上・下巻』<sup>90)</sup>の他に『看護婦養成資料稿』<sup>91)</sup>、『石黒子爵講演一日本赤十字社の揺籃時代』<sup>92)</sup>、『日本赤十字社中央短期大学90年史』<sup>93)</sup>、『近代日本看護史 日本赤十字社と看護』<sup>94)</sup>などを参考にした。



1890年（明治23年）に設立された日本赤十字社看護婦養成所に深く関与したのが石黒忠恵である。当時の新聞には「麹町区飯田町なる赤十字社に設けられし、各大臣、貴顕の夫人、令嬢が組織せられたる看護婦人会においては、各地方へ赤十字病院を新設するに付いては、看護婦を養成せんとして、近々府下へ看護婦伝習学校を新設し、生徒を募集せんと協議中なりという。」<sup>95)</sup>と報道されている。

石黒は1886年（明治19年）、陸軍省医務局次長であった。1887年（明治20年）には欧州に派遣され、バーデン・カルスルー万国赤十字第4回総会に参列した。ドイツはわが国が医学教育のモデルとした国であり、日本政府の求めに応じて来日したミュルレル教授、ホフマン教授、ベルツ教授、スクリバ教授などは日本の医学教育の発展に大きく貢献したし、コッホやウィルヒョウはその得意な分野で顕著な業績を上げていた。ドイツの看護教育に大いに期待した日本赤十字社看護婦養成所は、看護の教育者もドイツにもとめたがその望みは適わなかった。

ドイツの看護教育に目を向けてみた時、当時は十分な教育のコースができていたわけではなく、看護実践はキリスト教が母体の宗教団体によるものであった。当時、“婦人執事”（ディーコネス Deaconess）という病人や貧乏な人々への奉仕活動をする婦人団体の組織があった。これに関わる女性達を教育する為に建てられたのがカイゼルスウェルト学園である。同学園は1837年（天保8年）にテオドル・フリードナー牧師<sup>96)</sup>によって設立された。ディーコネス達にとってこの学園は“母の家”となっており活動の拠点でもあった。ナイチンゲールは1850年（嘉永3年）にドイツのカイゼルスウェルト学園に学ぶ機会を得た。このカイゼルスウェルト学園での看護婦の教育方法に関しては、ナイチンゲール自身が1851年（嘉永4年）にまとめた『カイゼルスウェルト学園によせて』<sup>97)</sup>の中に書き留められている。

ナイチンゲールが看護教育らしき教育を受けたのは、このドイツにおけるカイゼルスウェルト学園のみである。ナイチンゲールはこの少ない看護教育経験と自身が見聞した全ての経験から学び、理想とする看護婦育成のための独自の方法を考え出した。一般にナイチンゲール方式と呼ばれる教育方法については先述した『ナイチンゲール方式による看護教育の特徴とその拡がり—教育の創造

と伝承—』や『ナイチンゲールの看護観—その目的実現のための教育方法—Nursing is not an Art but a Character』<sup>98)</sup>で報告した。その教育は“見習い制度”であり、見倣うことによる教育作用を十分に意識したものであった。そして、教育方式はナイチンゲール方式と呼ばれ、①マトロン（Matron）と呼ばれる看護総監督の存在、②寄宿舎におけるホーム・シスターによる教育、③医師による基礎専門教育、④病棟シスターによる実践教育の4つにおいて特徴的とされる<sup>99)</sup>。ドイツのウィルヒョウは早くから看護教育の実践に対してナイチンゲール方式の採用を提言していた。しかし、実際に、ナイチンゲール方式がドイツにもたらされたのは1886年（明治16年）のことである。それはビクトリア女王の娘であるフレデリック皇后<sup>100)</sup>が、ビクトリア慈善病院をドイツに設立し、看護婦の教育をナイチンゲール方式によって開始したことに始まる。しかし、『ビクトリア女王の娘』<sup>101)</sup>によれば、当時、このフレデリック皇后と“鉄の宰相”といわれたオットー・エドワード・ビスマルク<sup>102)</sup>との思想的な違い、つまり、肌が合わないといった感覚は大きく、英国的な発想からなるナイチンゲール方式による看護教育が定着する土壌は薄かったと思われる。結局、日本赤十字社看護婦養成所は、形式的にはナイチンゲール方式を採用しつつ、教育については軍医たちがその教育を担った。

1894年（明治27年）に看護婦監督として採用された高山盈<sup>103)</sup>は、看護婦の教育を受けているわけではないが、看護婦監督に適任<sup>104)</sup>であると判断された為の抜擢であった。高山は、福山藩士の妻であり、負傷兵を看護した勇敢で気丈な武家女性として、困窮した経済状態を乗り切った敏腕な女性として、又、自身が手術をした際に苦痛の呻き声も出さず我慢強い女性であったことが沈着冷静の持ち主として評価された。それらの特性は看護監督者として最も重要であると判断した橋本日本赤十字社病院長が推挙したものであった。高山は、看護婦の教育に対して「向後此事業に従事せんとするものは其手腕の熟練よりも己を支配する自己の品性と千難萬難に屈せず撓まざる覚悟のあるや否やの二つをまず顧みざる可らず」<sup>105)</sup>と述べている。この高山の考えは看護教育に反映されたであろう。1896年（明治29年）の『日赤看護学教程』<sup>106)</sup>によれば、日赤看護婦たちには腕の熟練よりも己を支配する自己の品性と何事にも屈しない



不屈の精神が求められた。

日本赤十字社看護婦養成所設立に先立って、1889年（明治22年）に日本赤十字社看護婦養成規則が策定されている。その規則第一条には、「本社看護婦養成所ヲ設ケ生徒ヲ置キ、卒業後戦時ニ於ケル患者ヲ看護セシムル用ニ供ス」と規定されている。養成所の設立目的は、戦時中の負傷兵の看護をする看護婦の養成であり、第二条には看護業務とその責務、卒業後2ヶ年は病院で看護婦の業務を行い、卒業後、20年間は身上にいかなる事態があっても、国家有事の際には速やかに本社の召集に応じることの規定が定められている。つまり、これは日本赤十字社看護婦養成所が、平時に有事のための教育をしておこうということあり、国家有事のときは一切の私事を捨て国家に挺身する人材の育成が目的であったことを示している。

石黒は、日本赤十字社看護婦養成所が設立された1890年（明治23年）には、陸軍軍医総監・陸軍省医務局長の職にあった。日本赤十字社病院を支援していた石黒は「傷病兵が重体になったときは、これを婦人の柔らかき手で看護するのでなければ用意周到な看護はできない。そこで戦時に軍隊医事衛生の援助を主眼とする日本赤十字社においてこれを養成し、戦時にこれを使用することとし、世が進と平時にも重病者には看護婦をつけるようにする。」<sup>107)</sup>と述べている。

1894年（明治27年）に日清戦争が勃発した。石黒は、野戦衛生長官、大元帥陛下（天皇）と共に広島に赴いた。日本赤十字社看護婦養成所卒業の看護婦をはじめて広島の予備病院につけた。1894年（明治27年）に看護婦監督として採用された高山は、男女の問題をとかく論評しやすい日本の風土の中で、風紀問題について慎重に取り計らった。石黒自身もそれは同じであり、陸軍に女性の看護者を導入するに当たって行った石黒の勧告、「看護婦に無礼をすると、思わず各自の長官の家族に無礼をすることとなるから、念の為注意しておく」といった言葉は有効であったようだ。

ところで、石黒がナイチンゲールに会ったとの事実を検証できるには至っていないが、『日本赤十字社史稿上巻』<sup>108)</sup>によれば、1907年（明治40年）、第八回赤十字国際会議に日本赤十字社代表委員として参加した副社長小澤男爵<sup>109)</sup>は、滞在中にナイチンゲール嬢を訪問したと記述されている。同誌文中では、ナイチンゲールの家族的看護婦養成所と表現されているが、小澤男爵は聖トマ

ス病院で看護婦養成所の管理をしていたヘンリー・ピ・カーター<sup>110)</sup>と面会をし、彼の紹介でナイチンゲールが身を寄せていた宅を訪問したと記述されている。実際には、ナイチンゲールが人事不省になっていたとのことで面会は不可能であった。そこで、小澤男爵は、日本の篤志看護婦人会から預かったプレゼントを、おつきの老婦人を介して渡すことができた。『フロレンス・ナイチンゲールの生涯』<sup>111)</sup>には、1907年（明治40年）6月の赤十字国際会議がロンドンで開催された際に、「ナイチンゲール女史は、初期の赤十字運動の先駆者であり、苦惨に喘ぐ人類の為に成した、その英雄的努力は、この世界の続く限り、あらゆる時代の人々の胸に記憶され、賞賛されることでしょう」<sup>112)</sup>というメッセージが贈られたと記述されている。同誌によれば、ナイチンゲールはこの頃、理解力を失い、盲目で記憶力も衰えていた。何時間も身動きせず意識も朦朧のまま、横たわって過ごした。そして、人々の記憶から遠ざかったこの時期、その栄誉を讃える動きが四方から湧き上がった。そして、「東京赤十字協会の婦人たち」<sup>113)</sup>からも賛辞のメッセージが届いたとの記述を発見する。国際赤十字は、ナイチンゲールの死後、“ナイチンゲール記章”を制定し、看護に従事して人道的な功労のあった人を表彰しているが、日本赤十字社もこれに倣ったのか、ナイチンゲールが没した年にナイチンゲール・石黒記念碑と基金を日本赤十字社に贈呈し、毎年、優れた看護婦に贈ることにした。ちなみに、日本赤十字社看護婦養成所を卒業した荻原タケ<sup>114)</sup>は、卒業後、従軍看護婦として活躍後、日赤看護婦の指導的役割を果たした。さらに、1909年（明治42年）には、日本赤十字社を代表してロンドンで開催された国際看護師協会（International Council of Nurses 略して ICN）に出席し、わが国における看護教育を諸外国に知らしめた。

以上から、彼の業績で顕著なことは、陸軍軍医制度を確立させたことと、陸軍との関係において日本赤十字社の維持・発展に貢献したことである。そして石黒は、日本赤十字社の幹部として、戦争との関連ではあったが、日本赤十字社看護婦養成所の看護教育に大きく関与し、日本における看護教育の発展を担ったことが主な業績であろう。

#### 4. 石黒忠恵ーナイチンゲールから受けた影響

石黒忠恵がナイチンゲールから受けた影響を論ずる前に、まず、石黒がナイチンゲールと面会できたのかという論点では、先述したように、石黒の生涯において彼が海外に出たのは、1876年（明治9年）と、1887年（明治20年）の2回である。彼の生涯史である『懐旧九十年』、『懐旧90年』いずれも内容はほぼ類似しており、ナイチンゲールと面会した事実は記載されていない。本人自身の語りを中心に第三者が編集した『懐旧九十年』に、そのことが語られなかったこと、そのことがナイチンゲールとの面会の是非に関する真実なのではないか。石黒にとって、もし、ナイチンゲールからの影響が強かったとしたら、生涯史編纂の際には、人生の衝撃の一コマとして紹介するであろう。

1910年（明治43年）、ナイチンゲールが没したときに石黒は、ナイチンゲール・石黒記念碑と基金を日本赤十字社に寄付し、毎年、優れた看護婦に贈ることにしたことは語っている。彼の中で、ナイチンゲールという人物が、国際赤十字設立の輝かしい業績を有していることと、名誉ある賞が多く、多くの国から贈られたことについて承知していたということである。ならば、自身が彼女に面会をしていたのであれば誉高きこととして記憶にとどめよう。ということになると『看護史』<sup>115)</sup>に記載されたナイチンゲールとの面会の事実はどういうことになるのであろうか？

石黒が、1882年（明治15年）に日本赤十字社常議員であったという事実から、石黒とナイチンゲールとの接点は日本赤十字社であり、それは国際赤十字の設立と関係が有る。もっと、言うならば国際赤十字の設立は戦争とは切っても切り離せない。わが国も、明治維新以降、列強諸外国との政治的関わりの中で、軍備の拡大は最優先事項であった。万が一、諸外国との戦いが生じた場合、兵士の負傷は避けられない。その時の医療活動に中立が保たれ、回復のための医療活動が迅速に行われることは重要な問題であった。大山陸軍卿と共に欧州視察旅行より帰国した橋本陸軍軍医総監の国際赤十字という活動への関心、それはジュネーブ条約加盟の提言となって現れた。佐野や橋本とともに赤十字社の創立に協力した石黒は「天皇陛下におかせられては、佐野氏より欧州各国赤十字社の事情や国際赤十字条約の事など聞こし召され、わが国もすでに徴兵制度を敷き、また漸次に列国に伍して種々の関係をも生ずることとなる

以上、国際赤十字条約に速やかに加盟しておくようにとの御思し召しあり」<sup>116)</sup>と述べている。1887年（明治20年）赤十字社は天皇陛下のお声がかりにより、既に設立されていた博愛社を日本赤十字社と改名、日本政府の正式な組織として発足、組織の充実を図った。

1882年（明治15年）石黒は、日本赤十字社常議員となったが、しかし、彼の主たる関心は、所属した兵武省役人の責務、つまり、医学の質向上を、特に軍医制度の確立とその充実にあった。その責務の一環として看護婦の養成が含まれた。女性を陸軍に導入する目的は、戦時中の傷病兵の看護が用意周到に実践されることである。石黒が、ナイチンゲール・石黒記念碑と基金を日本赤十字社に寄付し、毎年、優れた看護婦に贈ることにしたことから考えると、彼自身がナイチンゲールに対して崇高な気持ちを抱いていたことは事実であろう。1898年（明治31年）に出された“日本赤十字社看護婦訓戒”には、不屈の精神、敏速な行動、服従、忠誠心等がその主な内容になっている。こうした訓戒内容は“修身”にも見られるが、儒教精神の“武士道”的なものであり、看護婦を女軍人として精神強化しようと企画したと考えられる。すなわち、戦時においても勇敢に戦火を潜る必要があった。しかも冷静沈着に、速やかに、危険を恐れない不屈の精神は軍人の特性として必須である。

ナイチンゲールも軍人の規律に関しては強烈な印象があった。『平時および戦時の陸軍病院へ女性による看護を導入する件に関する補助覚書き』でナイチンゲールは、「軍人と言うものは、様々な欠陥を持ちながらも規律の習慣と精神とによって造り上げられたものであり、それは本能や第二の本性ともなり、それが持って生まれた人間性を高めているのである。試みに規律を緩めてみるが良い。しかも一般人と同程度に、軍人には普通の人間と同等あるいはそれ以上に野獣の本能が残るのである。」<sup>117)</sup>と述べている。つまり、軍律という軍人特有の規律が、男として本来持っている野獣の本能を封じ込めているという事、規律という最高権威者的要素を導入することによって軍人が通常に理性を保ち得るという事、又、そうした教育によって、秩序だった活動ができるようになるという事などが述べられている。日本赤十字社看護婦養成所は、当時の国粹主義的な考えの上になつて、石黒が訓戒したように軍律によって、軍



医および軍人達の予測される行動を容易に制御できたであろう。

ナイチンゲールが経験したように、クリミアでの医療体制は完全に崩壊していた。8連隊の73%が病気で死んだという事実、ナイチンゲールにすれば、それは人災であった。次々に送られてくる負傷兵達は伝染病の者も単なる外傷のものも一緒に収容され、次々に感染して死亡した。切断された創は開放されたままで何日も放置され、手術をする機械もその傷を覆う包帯も不足していた。食事は、衰弱した病人の食べられるようなものではなかった。バラックの野戦病院は下水が完備しておらず、飲み水と下水が合流している所もあった。これらは全て陸軍医務局の怠慢が原因であると考えられた。1861年（文久元年）12月付けのアトランティック・マンスリー『病院の衛生』<sup>118)</sup>には、クリミアにおける新聞記事が挿入されている。その中で、システムの愚かさによる病院での死亡率について言及され、一方の男性達の過ちによって、結果的に他方の勇敢な男性達が全て負担を背負った<sup>119)</sup>と総括された。

イギリス陸軍の改革については、既に『ナイチンゲールイギリス陸軍を改革する一学習（経験）したことから学習せよ』で報告したようにナイチンゲールとハリエット・マーティノー<sup>120)</sup>との共同戦線で行われた。マーティノーの『英国の歴史と陸軍の改革』<sup>121)</sup>によれば、任務の遂行に宗教的な対立や女性達の問題が存在した事は事実である。クリミア戦争中、戦地では傷病兵の看護をする為に本国から派遣されたナイチンゲールたち一行と、あくまでも陸軍に女性を入れる事を拒んだ軍医達とは、患者の看護という問題を越えて辛辣な戦いになっていた。特に、ナイチンゲールが最も関心を寄せたのは、戦時中の兵士の死亡率の問題と兵士の処遇改善の問題であった。兵士の死亡率の原因は戦いで受けた傷ではなく、感染症によるものが大半であった。そして、これらは、陸軍組織と病院の機構の問題、物資供給システム、医師の技術不足などの問題であり、これらに対して平時からしっかりとした手当てが成されない限り、戦時においてその機能が十分に生かされないとの主張であった。これらについては、彼女が後に戦時中の看護を総括した『平時および戦時の陸軍病院へ女性による看護を導入する件に関する補助覚え書』<sup>122)</sup>を読めば良く理解できる。ナイチンゲールは誰よりも“学習（経験）したことから学

習せよ”の主張者であった。ナイチンゲールの強い思いから発した陸軍の改革に行政面から大きな協力をしたのがシドニー・ハーバート<sup>123)</sup>、そして、学問的な見地から協力をしたのはジョン・サザランド<sup>124)</sup>、何よりも高い事務的能力を発揮して側面から協力したのはアーサー・ヒュー・クラフ<sup>125)</sup>であった。

石黒は陸軍軍医制度の確立をした人物として有名であるが、この制度導入に関してナイチンゲールからの直接的影響があったと考えられない。ナイチンゲールが辛酸をなめたクリミア戦争中の軍医たちとの熾烈な戦い、イギリス陸軍の兵士への扱い、戦時中の医療問題、戦後の陸軍の制度改革は、ビクトリア女王の進言や政治家の尽力を持ってしても問題解決には苦難な道のりであった。しかしながら、石黒は日本の陸軍軍医制度確立や、女性を従軍させることにおいて風紀問題などに神経を集中させた以外にはさほどの苦労はしていない。むしろ、日本では、日本赤十字社と陸軍省が協力し、看護婦養成所を設立・運営した事によってイギリスにおけるよりも遥かに容易に、陸軍に女性を導入する試みに成功したのである。それは、上流婦人たちあるいは篤志看護婦協会会員たちの協力が絶大であったろう。日本が儒教主義国家としてその思想を浸透させようとの国策と、儒教主義時代の江戸幕府政権下の武士階級の石黒にとって、当時の上流婦人たちあるいは篤志看護婦協会が、時代の権威あるトップリーダーの妻たちによって組織されているという事実は見逃せない。篤志看護婦協会会員たちは、1907年（明治40年）にロンドンで開催された第八回赤十字国際会議に参加した小澤男爵にナイチンゲールへのプレゼントを託している。

又、ナイチンゲールは実践的な女性解放主義者として時代の最先端を走った第一人者であり、看護教育の開始によって女性を社会に解放したという実績から、理想的な女性像をも覆した人物として有名であった。他方、石黒は検証する限りにおいて時代を先読みする先見の明を有していても基本的には儒教主義思想の典型である。荻野が医師国家試験を受験できないで内務省に懇願したときの発言に対して、石黒は、「婦人は総じて内気なもので、ことさら、婦人病などを露に診察される事を忌憚るものだから、それらに対して女医ができることは至極よろしかるべく」<sup>126)</sup>と女性特有の病気は女性が診察するのが宜しいとの理由で賛



成の意思を表明した。女性が男性の組織に食い込むことは大変に難儀な時代であった。また、そうした女性も僅かであり、石黒のような男性にいたっても萩野の才能と努力を認めたから賛成したのであろう。石黒の考えは両性の差異を意識したものであり、ナイチンゲールが女性に教育を施して社会的・職業的自立をさせたいとの考え方とは若干の相違があろう。

## ■ 佐伯理一郎

### 1. 佐伯理一郎の生涯

佐伯理一郎は医師であり、自身の思想・信条に基づいた行動の中で必然的に京都看病婦学校の運営に参画した。佐伯の生涯については、『阿蘇百年の人物誌』<sup>127)</sup>、『阿蘇が峰のけむりー明治の開業医・佐伯理一郎小伝』<sup>128)</sup>、『佐伯理一郎日記』、『佐伯理一郎と内村鑑三』<sup>129)</sup>、『佐伯理一郎ー同志社医学の支柱』<sup>130)</sup>、『看護学は学として成り立ちうるか』<sup>131)</sup>、『オスラーの教え子、佐伯理一郎の人と業績(上)(下)』<sup>132)</sup>、『佐伯理一郎関係資料』<sup>133)</sup>等を参考にした。しかしながら、これらの人物誌はいずれも短編であり、著者の身近に存在する資料を基に構成されていると同時に、著者の関心の高さと限られた紙数の中での記述であるので、断片的であり、人物紹介のそれぞれの記述に若干のずれがある。そのあたりに配慮しながら、彼の生涯を概観する。

佐伯は1862年(文久2年)一の宮町(熊本県)に生まれ、1877年(明治10年)に熊本洋学校に入学した。この年、西南戦争が起き、熊本城が焼け落ちた。1878年(明治11年)には熊本医学校に入学し、浜田玄達<sup>134)</sup>に医学を学んだ。入学後に熊本バンド<sup>135)</sup>と称するストライキがあり、39名もの退学者を出した。その中に徳富蘇峰<sup>136)</sup>や海老名弾正<sup>137)</sup>がいた。佐伯はこの仲間には加わらず、熊本医学校にとどまった<sup>138)</sup>。1881年(明治14年)、医師試験に合格、1882年(明治15年)、医師免許が内務省より授与された。同年、熊本から上京、熊本県人宿舎である有斐学舎に入った。上京後は勉学に励んだが、この東京勉学時代に佐伯は多くの著名人との出会いを果たしている。彼はドイツ語学習に取り組む傍ら、熊本医学校の先輩、北里柴三郎からアナトミー(Anatomy)を習い始めた<sup>139)</sup>。1883年(明治16年)、久松座というところで開催されたキリスト教の演説会で小崎弘道<sup>140)</sup>

に出会った。この年は、氷川町の赤坂病院医師、ウィリアム・コグスウエル・ホイットニー<sup>141)</sup>の知遇も得た。ホイットニーはペンシルバニア医科大学を優秀な成績で卒業した宣教師でもあった。翌、1883年(明治16年)には勝海舟<sup>142)</sup>と山岡鉄舟<sup>143)</sup>をたずねた。又、1884年(明治17年)には、神田佐柄木町にあった杉田玄端<sup>144)</sup>が開いていた講義所で学んだ。同じ講義所に内村鑑三<sup>145)</sup>がいた。同年、新島襄<sup>146)</sup>の説教を聞いて感動したりもした。そして、小崎の紹介でキリスト教の洗礼を受けた。

1883年(明治16年)10月、海軍軍医補(海軍少尉)となり、横須賀の海軍病院に赴任した。1885年(明治18年)からアメリカ留学を志願していた佐伯に対して、1886年(明治19年)に許可がおりた。佐伯は横浜のヘボンの紹介で、彼の母校であるアメリカのフィラデルフィア市にあるペンシルバニア医科大学に留学した。彼は留学中の1887年(明治20年)にノースフィールドで内村と再会し、新渡部稲造<sup>147)</sup>とはフィラデルフィアで知り合った。佐伯は1888年(明治21年)にペンシルバニア医科大学を卒業し、医学博士の称号を取得した。余談ではあるが、日本オスラー協会では、佐伯がペンシルバニア医科大学の看板教授であったウィリアム・オスラー<sup>148)</sup>の唯一の日本人であったのではないかと注目している<sup>149)</sup>。

佐伯は3年の留学期間を1年残して卒業したので、4月には、ドイツに向けて出向した。ボンでは新渡部が迎えに来てくれた。ボン大学で婦人科学・小児科などを学んだ。5月には石黒とも会っている。石黒は、1887年(明治20年)9月に欧州に派遣され、バーデン・カルルスルーエ万国赤十字第4回総会に参列したことが記述されている。そして、『佐伯理一郎日記』には、1888年(明治21年)5月に石黒が来独したことが記載されている。石黒は、1887年(明治21年)9月には帰国している。1889年(明治22年)6月に佐伯は、ハレ大学に転学、7月にはライプチヒ大学に転学した。1890年(明治23年)にはドイツを離れ、パリ経由でロンドンに到着した。5月に聖トマス病院、ロンドン病院などを見学した。1891年(明治24年)には日本からの指令によって、イギリスで製造された軍艦千代田で帰国の途についた。

佐伯がナイチンゲールに面会をしたということであれば、パリ経由でロンドンに到着し、軍艦千代田で帰国の途につくまでのロンドン滞在時代な

のではないかと考えられた。その為、ロンドン時代に主として母親に宛てた佐伯の書簡<sup>150)</sup>を調査してみたが、書簡は日常的に彼が見聞したことは記載されたが、ナイチンゲールに面会をした記載はなく、ロンドン時代の『佐伯理一郎日記』にもその記載はない。そして佐伯が人生後半で結婚した妻が編集した『阿蘇が峰のけむりー明治の開業医・佐伯理一郎小伝』にもナイチンゲールとの面会の記録はない。したがって、現在のところ、佐伯がナイチンゲールと面会したという事実は『阿蘇百年の人物誌』以外には手がかりがない。

佐伯のロンドン時代は1890年(明治23年)であるが、『阿蘇百年の人物誌』には、1889年(明治22年)の欧米留学中に英国に視察に行った佐伯がナイチンゲールと面会した<sup>151)</sup>と記述されている。しかし、佐伯の1889年(明治22年)代はドイツ在住時代である。『阿蘇百年の人物誌』による記述が正しいとしたら、佐伯は自身のドイツ滞在時代にナイチンゲールとの面会を果たしたことになる。しかも、石黒と一緒にと推測するが、現時点で確証が得られない。

『阿蘇百年の人物誌』には、佐伯はかねてより、ナイチンゲールの勇ましい、そしてキリストの教えを貫く人類愛に深い尊敬の念を抱いていたと記述されている。そして、面会時の記載としては、ナイチンゲールは疲労から病床にあり、面会謝絶の安静な生活をしていた。病室には①病院や看護のことに興味を持つ者以外はいっさい面会しない。②面会はお供を連れなくて、ひとりであること。③儀礼いっさい不要ーとの張り紙がしてあったそうだ。ナイチンゲールの名声を知って社交界の名流たちがうるさく訪問していたので、これを避けていたらしい。佐伯は医療助手としての看護婦の必要性を感じていたので面会を申し込んだ。そして、佐伯は「自分は軍医である。看護の任務がどんなものであるか、研究して日本でも採用できるものかどうか知りたい」と面会を申し出た。

ナイチンゲールは自分の体験と看護婦の使命を教え、日本にも看護婦が必要であろうと励ましたとのことである。そして最後に、後に参画するようになった京都看病婦学校の運営ではナイチンゲールから受けた知識が役に立ち、その教育ではナイチンゲールの精神とキリストの教えをたたきこんだ<sup>152)</sup>と記述されている。面会はお供を連れなくて、ひとりであることの条件があったことを考えると、石黒の同伴はなかったのかもしれない。

い。1891年(明治24年)に帰国した佐伯は、帰国後も軍医として働いていた。その後、京都看病婦学校に参画するようになる。

京都看病婦学校は1886年(明治19年)に看護教育を開始した。『京都看病婦学校五十年史』<sup>153)</sup>には同校の創立は新島、ベリーの両氏であり、これに協力したのがリチャーズ、中村栄助であると記述されている。ジョン・カッティング・ベリー<sup>154)</sup>は、アメリカン・ボードの宣教医であり、1871年(明治4年)1872年(明治5年)に来日して、神戸市で貧しい人たちの施療に当たっていたが、1983年(明治16年)には京都に移り、新島の医学学校、病院、看護婦学校の設立計画に参画した。リンド・リチャーズ<sup>155)</sup>は、アメリカのボストン、ニュー・イングランド病院看護婦養成所の第一回目の卒業生であり、アメリカで最初のトレンド・ナースである。中村栄助<sup>156)</sup>は京都商家の出身であるが、新島に対して敬愛の念が高く、資金集めに奔走するなど設立に向けて協力すると同時に、大学が窮地に陥るたびに、財政面からその困難を乗り切る為に全力を尽くした。

1890年(明治23年)に新島が突然死亡した。新島の死後、アメリカン・ボードと新島との間に成立していた関係が決裂し、京都同志社同様に京都看病婦学校の運営も危機的状況に追い込まれた。翌、1891年(明治24年)内村鑑三不敬事件<sup>157)</sup>が起きるに至って、キリスト教主義教育への圧力がかけられるようになった。既に、1890年(明治23年)に教育勅語を発令し、儒教主義思想を志向するわが国の為政者達は、より西洋的になって行く女性達の姿を国家存亡の危機的状況として捉えた。女性達が他民族との交わりによってわが国独自の民族が滅亡してしまうとか、国力の衰退に繋がるのではないかとといった推測が不安もたらしたのである。これらと相俟って、1889年(明治22年)には井上哲次郎<sup>158)</sup>の『内地雑居論』<sup>159)</sup>に端を発する論争も起きた。1890年(明治23年)にはリチャーズ(在日期間1886年1月ー1890年10月)の後任としてミス・スミス(Ida V. Smith 在日期間1888年ー1891年)が看護教育に当たった。ミス・スミスの後任として1891年(明治24年)にはヘレン・E・フレーザー<sup>160)</sup>が来日し、看護教育を引き継いだ。彼女にも帰国命令が出された。フレーザーは帰国に際し、『実用看護法』<sup>161)</sup>を著した。

1893年(明治26年)、佐伯は京都同志社のメリー・フロレンス・デントン<sup>162)</sup>の紹介により小



糸という女性と結婚した。1894年（明治27年）には日清戦争が起き、長崎・佐世保に勤務した。1895年（明治28年）、佐伯は戦争終結後に軍医をやめ、同志社を頼って京都に産婦人科病院を開業した。そのかわりで、同志社病院の経営に関わり、院長のベリーを助けた。そして、京都看病婦学校で産科学の講義を担当するようになった<sup>163)</sup>。1896年（明治29年）、同志社宣教師総辞職事件<sup>164)</sup>が起き、同志社は資金面の援助を全く失った。翌、1897年（明治30年）、看護婦学校は同志社より移管された病院共々、佐伯の管理下に置かれるようになった。

文部省は1899年（明治32年）に“私立学校令”を發布し、私立学校の経営に関する監督を強化した。その内容は以下の通りである。  
「一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムル学政上際必要トス依テ私立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許サザルベシ」<sup>165)</sup>

教育政策上、わが国は教育と宗教を分離する方針を取ることににより、政府は暗にキリスト教を排除する政策をとった。その教育政策は、女子中等教育系の私立学校を苦悩に落とし入れた。

佐伯は1900年（明治33年）、産婆開業試験医となり、関西産婦会を開催するようになった。1895年（明治28年）、京都看病婦学校の教育に参画するようになった佐伯は、クリスチャン・アルベルト・ビルロート<sup>166)</sup>の『普通看病学』<sup>167)</sup>を翻訳・出版した。1901年（明治34年）には、大日本婦人衛生会が主催する『婦人衛生雑誌』<sup>168)</sup>142号（9月）に、京都看病婦学校卒業式の写真を提供し、同年の145号（12月）には『患者の特異性及び看護婦の監督に関するナイチンゲール女史の訓戒』<sup>169)</sup>を、1902年（明治35年）の146号（1月）には『京都同志社病院内看病婦学校訓言』<sup>170)</sup>を寄稿している。『婦人衛生雑誌』は大日本婦人衛生会<sup>171)</sup>が1888年（明治21年）に創刊したものである。発起人はわが国の女医第一号である荻野と桜井看護婦教育所第一期生卒業の鈴木まさ<sup>172)</sup>等である。創刊の目的は、女性に対して衛生知識を普及して、健康保持増進の啓蒙運動をすることであり、新しい看病・調理・洗濯・育児法などについての学識経験者の講演や執筆などが掲載されている。

又、佐伯は1901年（明治34年）に『日本女科史』<sup>173)</sup>を著しているが、その序文には三宅秀や

富士川游<sup>174)</sup>などの推挙によりと書かれている。三宅は、1863年（文久3年）の遣欧使節に随行した後に横浜のヘボン塾で英学を学び、元アメリカ海軍医ウェッダー（Alexander M. Vedder）の助手となって医学を学んだ人物である。医学教育終了後、三宅は東京大学へ出仕し、1881年（明治14年）東京大学医学部長、医科大学教授、医科大学長を歴任した。彼は東京大学初の医学博士であり、1903年（明治36年）には東京大学初の名誉教授となった。そして、1891年（明治24年）には貴族院議員となって政界で活躍した。三宅の父親はお玉が池種痘所（現東京大学医学部）の創設に加わった人物である。

富士川については、筆者が『わが国における小児精神医療のパイオニア富士川游の生涯とその思想』<sup>175)</sup>で報告したように、広島県出身の医師であると同時に哲学者であり、医学史の研究者であり、人の精神性を宗教的な立場から論じた宗教学者であり、子どもの健全育成から論じた教育者である。富士川も又、『婦人衛生雑誌』に多くの論文を寄稿している。特に、看護法に関する論文は、筆者が『小児精神医療のパイオニア富士川游の看護観』<sup>176)</sup>で報告している。『日本女科史』の内容は、主として我が国の古くからのお産の方法と女医の歴史的展開等について論じたものであり、それは律令国家時代あるいはさらに古代までも遡る。

佐伯は1903年（明治36年）には柳の馬場に佐伯産婦人科病院を設立し、1910年（明治43年）には室町に京都産院を設立した。1935年（昭和10年）に妻小糸が死亡、1937年（昭和12年）には、よし子という女性を後妻に迎えた。1953年（昭和28年）、92歳で死亡した。

## 2. 京都看病婦学校設立と佐伯理一郎の関わり

京都看病婦学校の設立経緯については『同志社90年史』<sup>177)</sup>、『新島襄その時代と生涯』<sup>178)</sup>、『京都看病婦学校五十年史』<sup>179)</sup>、ベリーの演説『Training Schools for Nurses（看護婦のための訓練学校）』<sup>180)</sup>を参考にした。

京都看病婦学校は、同志社大学の敷地内に設立された看護婦養成のための学校である。同志社大学の設立は新島襄である。新島は21歳のとき、密航をしてアメリカに渡り、アマースト大学で本格的な教育を受けた。1870年（明治3年）には、駐米少弁務使をしていた森有礼<sup>181)</sup>に出会い、翌、1871年（明治4年）に森の斡旋で明治政府から密



航の罪を許された。在米中、岩倉使節団の案内役及び通訳として随行した。その後、彼はアンドッパ神学校に入学した。卒業後、アメリカン・ボードの宣教師として1874年(明治7年)に帰国した。

新島は最初、大阪の地に大学設立を企画したが、許可が得られなかったため、京都にその地を定めた。京都という地は明治維新のころから、尊王攘夷運動<sup>182)</sup>のさかんなところであった。又、仏教的な寺院が多く立てられている歴史的な地である。そこにキリスト教主義思想の学校が設立できるかどうか疑問の多い点であった。しかし、彼は木戸孝允を通じて京都府知事榎村正直<sup>183)</sup>に大学設立許可を求めた。さらに、勝海舟と京都府顧問の山本覚馬<sup>184)</sup>の協力により、薩摩屋敷の跡地を得ることができた。1875年(明治8年)、新島は同志社英学校を設立することができた。この設立には宣教師デビス<sup>185)</sup>の協力も大きかった。

新島は学校設立に関して自由と自治の精神を持ってその校風とし、更に、単にキリスト教伝導の目的で生徒を教育しようとしたのではなく、キリスト教の精神で以って、国民の精神を陶冶しようと試みた。新島の教育目的は「神学、政治、文学、科学などに従事するに拘らず、皆精神活力あり、真誠の自由を愛し、以て邦家に尽くす可き人物を養成するを務む可き事。」<sup>186)</sup>という彼の言葉に良く表れている。新島は、道徳的に優れた人物が少なくなってきた原因の一つに“男女の不平等”があると述べ、女子教育の向上に尽力するよう後進に依頼している。同時に彼は「頼みなき事業あり、そは外の事ならず、女権を拡張する事にもう一層の力を尽くされたしこれ今日の形勢において実に大切な事なり、何となれば近来人物少なく、道徳廢れたるは、原因様々なれども、道離れたると、社会進歩するに随て、男女の権、平均を得ざるとに由る所以なり。」<sup>187)</sup>とも述べている。これらから新島の女子教育論は“男女平等”であったことが伺える。

『同志社90年史』の年表には1886年(明治19年)、宣教師デビスは邸内の一棟に同志社病院の仮診療所を開く一方で京都看病婦学校の授業を開始したと記述され、校長一新島襄、病院長一ベリー、看護教育者一M・L・リチャードと書かれている。又、1886年(明治19年)、5月1日付けの内外新報には、“看病学校設立一米国人の力でできる”との報道と同時に、「米国の医師ベリー氏はわが国にまだ一つの看病学校もなく、従って、適當の

看病人のあらざるを以って、京都に同学校の設立を2・3人の有志に相談したところ、おおいに賛成を得、本国に適當の教師招聘の事を照会し、其相談調ひたる上にて直に其の設立に取り掛かるべし。」<sup>188)</sup>と報道された。病院長として紹介されたベリーは日本の看護婦が無学文盲では、完全な医療は望めないとして看護婦養成所設立の必要性を説いている<sup>189)</sup>。

M・L・リチャードとは、先述したアメリカのリチャーズのことであろう。リチャーズは1874年(明治7年)から1877年(明治10年)までマサチューセッツ総合病院のボストン看護婦学校で教育を行った。1877年(明治10年)、4月から11月までイギリスのエジンバラにある王立病院の看護婦学校で教育を受ける機会を得た。その時、ナイチンゲールに直接会うことができた。リチャーズにあったナイチンゲールは王立病院総婦長のプリングル<sup>190)</sup>に「私は彼女に会いましたけれども、希に見る立派な人物であると感じました。彼女が私達から学ぶのと同じくらいに、私達は彼女から学ぶものがあると思います。」<sup>191)</sup>と手紙を書き送っている。

見学がどの程度の功を奏するかは、その人が元来持っている関心の深さと能力による。日本でのリチャーズは、すでにアメリカで正式に教育を受けた看護婦であったから、その実践から、様々な問題意識を有していたと考えられ、新しい看護法及び看護の教育方法を吸収する事には貪欲であったと思われる。看護に対するナイチンゲールの教育方法を確かな手応えとして本国に持ち帰り、自己の看護観にこれを加え広げたのであろう。イギリスから帰国後のリチャーズはボストン市立看護婦長、兼看護学校監督となり、後進の教育に当たった。この市立病院では様々な問題を抱えていたが、彼女は常に鋭い見識でその問題解決にあたり、あらゆる反対勢力の中で、最善を尽くした。1885年(明治18年)にボストン婦人伝道局から、日本への看護婦教育の話しが持ちかけられた。早速彼女はこの申し出を受け、日本への赴任に踏み切った。リチャーズは、1886年(明治19年)に開設された京都看病婦学校における教育に大きく貢献した。

同志社大学が新島生誕150年記念に発行した『新島襄その時代と生涯』には、新島の1886年(明治19年)の“看護婦学校設立アピール草稿”に看護学校設立目的が明確に示されている。看護学校

設立の目的について新島は、ナイチンゲールがクリミア戦争で傷病兵の看病をしたり、看護婦学校を設立したりしたことに端を発すると述べた。しかし、それは結果であるとして、ナイチンゲールのそうした働きはその根底にキリストの教えがあると述べ、「基督ノ教ヘラレタル内ニ、己ヲ愛スル如ク人ヲ愛スベシ、人誰カ己ヲ愛セサルモノアラハ、己ヲ愛スル如ク人ヲ愛セハ真ニ基督ノ意ニ叶フモノデゴザリマス 此ノ貴重ナル教カ此種類ノ学校ノ原因ニシテ、ナイチンゲール女モ此教ノ注意ヲ奉職シテ戦地ニ入り負傷者ヲ助け、又続キテ学校ヲ起シタ事デゴザリマス 今文明諸国ニ人々カ多分ノ金ヲ投シテ病院、幼院、癲狂院又ハ看病婦学校等ノ設ケアルハ、社会ノ為ニ計ル所ノ純乎タル慈善心乃宗教心ヨリ起コテ、人ヲ助け人ヲ救フヲ以テ目的ト為ス所デゴザリマス、而シテ此目的ハ基督ノ人ヲ愛（セ）ヨト云フ教ニ原因スル訳デゴザル」<sup>192)</sup>と述べている。つまり、新島はナイチンゲールのキリスト教的愛の実践が看護であると判断し、純粋に社会のためになるような慈善の心を喚起する目的を持って看護教育を施そうと考えたのである。

しかしながら、1890年（明治23年）新島の死後、京都看病婦学校はアメリカン・ボードと新島との間に成立していた関係が決裂し、多くの問題を抱え込んだ。加えて、1896年（明治29年）には同志社宣教師総辞職事件勃発に至っては資金面の援助をも失った。同年、リチャーズの後任として看護婦教育に当たっていたフレイザーも帰国した。翌、1897年（明治30年）、看護婦学校は同志社より移管された病院共々、佐伯の管理下に置かれるようになった。佐伯の管理下にあった京都看病婦学校は、アメリカとの国際的な交流は継続されたようである。1903年（明治36年）には、アニタ・ニューカム・マギー<sup>193)</sup>一行7名が5月に京都看病婦学校を訪問している<sup>194)</sup>。マギーは女医であり、日露戦争<sup>195)</sup>の可能性が高まったために米西戦争看護婦協会から駐米公使に対し、救護活動の協力を求められて来日したのである。彼女らの京都看病婦学校の訪問は、ミス・フレイザーの紹介によって実現したものである。日露戦争には、京都看病婦学校からも救護班の派遣を行っている。

1905年（明治38年）、同志社理事会は京都看病婦学校の廃止決議を発表した。卒業生で組織された同窓会はこれに反対運動を行い、理事会に対し存続の嘆願書を送りつけた。その結果、佐伯病院

への移転を方向づけた<sup>196)</sup>。1911年（明治44年）には、ヘンリー・ストリート・セツルメントにおける社会事業家のミス・ウォード（Miss Wald）とミス・ウォーター（Miss Water）の2名が世界看病誌編集目的で京都看病婦学校を訪問してきた。彼女たちのインタビューに対し、佐伯は日本における医療について語り、特に光明皇后の悲田院におけるライ救済事業について語ったという。佐伯によれば、後日、アメリカから送られて来た『世界看病史』には、佐伯の内容と皇后陛下の写真が載せてあった<sup>197)</sup>。

ニューヨークにある The Heritage Press から出版された『A History of Nursing』<sup>198)</sup>は、メアリー・アデレード・ナッティング<sup>199)</sup>とラビニア・ロイド・ドック<sup>200)</sup>の30年にわたる看護の歴史研究の成果であり、1907年（明治40年）から1912年（明治45年）に著した著作である。著作の第Ⅳ巻、“Japan（日本）”編の筆頭には、この報告がミス・ウォールドとミス・ウォーターからの情報提供であるとの記述を見出すと同時に、光明皇后の写真が掲載され、約1200年前に実践された光明皇后の悲田院におけるライ共済事業のことが記述されている。又、当時の日本における看護教育については京都看病婦学校とリチャーズ、日本赤十字社看護婦養成所と萩原たけについて記述された。加えて日清・日露戦争に養成された日本の看護婦が従軍した事実やマギー女史一行の件についても触れられた。よって、佐伯が述べるミス・ウォードとは恐らく、アメリカにおける地域看護のパイオニア、リリアン・ウォールド<sup>201)</sup>のことであろう。

『ヘンリー・ストリートの家』<sup>202)</sup>でも示されたように、ニューヨークのヘンリー・ストリート・セツルメントはウォールドとドックとの共同事業であった。信じがたいほど悲惨な環境の中でひどい病気になり、貧民街に住む婦人が放置されていることにショックを受けた<sup>203)</sup>ウォールドは、貧しい病人のために地域看護サービスを開始した。又、『A History of Nursing』によればドックは、ベルビュー看護婦養成所の卒業生であり、International Council of Nurses（国際看護師協会）の理事として紹介されている。ドックはアメリカにおける看護の専門職化と専門看護の国際化の活動家であり、看護学の歴史家であり、同時に公衆衛生看護の第一人者であった。

余談ではあるが、看護の歴史に関するドックの業績については『看護・医療の歴史』<sup>204)</sup>や『ICN



の歴史』<sup>205)</sup>に詳しく述べられている。ドックはイザベル・スチュワート<sup>206)</sup>と共同で『アメリカ看護史』及び『A Short History of Nursing』<sup>207)</sup>を1938年(昭和13年)に執筆している。杉田の『看護史』ではこの翻訳本が『世界看護史』であると記述されている<sup>208)</sup>。しかし、内容的には全く違うことから、佐伯が述べる『世界看護史』と同一著作ではないであろう。

先述した『A History of Nursing』は、2000年(平成12年)に再編されて『A History of Nursing』<sup>209)</sup>として出版されているが“Japan(日本)”部分も含め、ほぼ同様の内容である。壮大なスケールで看護の歴史を検証したその著の第Ⅳ巻は、日本・フィリピンも含んであり、ドックの単著である。同著によれば、日本の看護教育機関としてまず筆頭に掲げられているのは京都看病婦学校であり、次に日本赤十字社看護婦教育所についてである。また、光明皇后と萩原たけ、“Suwo Choko”という人物の写真が掲載され、各人の日本における活躍が述べられている。“Suwo Choko”についてはアメリカで最も有名な日本人であると紹介され、アメリカのヘンリー・ストリート・セツルメントで地域看護を行い、日本に帰ってから地域看護を実践している看護婦である<sup>210)</sup>と記述されている。“Suwo Choko”という看護師は、京都看病婦学校第二回卒業生の不破勇子〔ちよこ〕ではないかと筆者は考えているが今のところ確証はない。

以上のことから、佐伯が語った『世界看護史』は、京都看病婦学校に来日したミス・ウォルドとミス・ウォーターに、佐伯が語った内容が『A History of Nursing』に掲載されたと考えている。佐伯によって日本における看護教育の実際と歴史が紹介されたことは特筆すべできあろう。ミス・ウォーターについては、現在のところ明らかではない。

京都看病婦学校は1913年(大正2年)に看護婦規則を制定した。規則によれば、修業年限は2年である。学期と学年が2分割され、学期ごとの学科目と科目時間数が規定された。入学資格は、16歳から30歳までの品行方正で身体強健なものとされた。『京都看病婦学校五十年史』は、1936年(昭和11年)までの記録であるが、最後のページには備考欄が設けられ、卒業生854名のうち、佐伯が同校を引き継ぐ前の卒業生は23名、残る831名は全て佐伯が自ら教授した者たちであると記述され

ている。京都看病婦学校は新島、ベリーによって設立されたが、その発展と維持・運営は佐伯によって成された。新島のキリスト教的教育信条は京都看病婦学校の設立に反映され、その理念は佐伯にも継承され、教育実践されたと考えられる。この後、1941年(昭和16年)に日本は太平洋戦争に突入した。敗戦後の1951年(昭和26年)、保健婦助産婦看護婦法が制定され、看護婦の養成も新制度に切り替わった。佐伯が死亡した1953年(昭和28年)に京都看病婦学校は廃校になった。

### 3. 佐伯理一郎ーナイチンゲールから受けた影響

佐伯の生涯と京都看病婦学校設立経緯及び、同校の運営に参画した佐伯との関わりから、佐伯が、いかにナイチンゲールから影響を受けたかについて論じる。

まず、医師としての自己実現を果たす道中において、最初にキリスト教との出会いがあると考えられる。そのキリスト教との出会いは、国内外の知人との出会いにつながり、それが看護教育との出会い、ナイチンゲールとの出会いにつながっている。ゆえに佐伯の生涯から考えると、自身が貫く人生の大きな根幹、すなわち、人間としての精神性昂揚にはキリスト教の教えがあったこと、それは医師としての医療実践につながったこと、その活動の中に看護教育があったことである。彼の思想は、ナイチンゲール一辺倒ではないがしかし、看護教育については、ナイチンゲールの看護教育思想の影響を大きく受けていると考えられる。又、佐伯自身が編纂した『京都看病婦学校五十年史』には、開学に尽力した新島やベリー、看護婦教育に尽力したリチャーズやフレーザーなどのキリスト教的愛の精神が大きく関与しているとも考えられ、彼女たちがナイチンゲールの教育哲学に影響を受けているとしたら、それは直接・間接を問わず、佐伯にも影響を与えていたであろう。先述したようにリチャーズは、ナイチンゲールと直接会って指導を受けたアメリカのトレンド・ナースであり、ナイチンゲール自身が絶賛した人物である。京都看病婦学校での協働では互いに影響を及ぼしたと考えられる。佐伯はかねてより、ナイチンゲールの勇ましい、そしてキリストの教えを貫く人類愛に深い尊敬の念を抱いていたと記載されている。これらはクリミア戦争に従軍した勇敢さと、その根底にあるキリスト教思想の忠実な実践者としての評価の言葉であろう。



熊本日日新聞には、佐伯が「看護婦学校ではナイチンゲールの精神とキリストの教をたたきこんだ」<sup>211)</sup>との記載がある。彼がキリスト教の愛の精神を看護婦の資質に必要なものであると判断し、訓育をしたと考えられる。看護婦育成における佐伯の考えは、1901年（明治34年）、『婦人衛生雑誌』に寄稿した『患者の特異性及び看護婦の監督に関するナイチンゲール女史の訓戒』にある。これが次の寄稿文『京都同志社病院内看病婦学校訓言』につながっていると考えられる。佐伯が1901年（明治34年）に『婦人衛生雑誌』に寄稿した『患者の特異性及び看護婦の監督に関するナイチンゲール女史の訓戒』には「フローレンス・ナイチンゲール女史の多くの患者に対する特異性の観察及び之に必ず看護婦の監督指揮は、実に吾々の及ぶこと能はざる拔群の経験、故に余は女史の著書“Notes on Nursing” by Florence Nightingaleより其最も必要な点を左記に抜粋せん。」と述べられ、特に騒音、睡眠、変化、食物などがその主要な論点であるとして自身が参画した京都看病婦学校の運営にナイチンゲールから受けた知識が役に立ったとも述べている。ナイチンゲールの『Notes on Nursing（看護覚え書）』<sup>212)</sup>は、1860年（万延元年）に出版され、当時のイギリス社会でベストセラーになったほどの著作であり、人々の日常生活と健康との関係を丹念に述べたものである。それは同著の序言に述べられたとおり、看護の教育のためではなく、全ての女性たちに向けられた著作である。人々の日常生活と健康との関係を考察しながら、看護であることとないことを論じたその著は、身近ではあるがしかし、緻密で繊細、そして壮大なスケールで健康を科学的に捉えようとしたものである。

1902年（明治35年）に佐伯が著した『京都同志社病院内看病婦学校訓言』は、主として養成すべき看護師に必要な訓示内容である。その内容はまず、（一）同情は心の裏に隠されせられたる真正の愛の顕表たるなりという訓言に始まって、（三十一）生くる為に食し食する為に生くべからず等の内容で構成されている。特に（五）基督の愛によりて養われざる愛は真正の愛にあらず故に斯の如き愛を把持せる看護婦は一の価値なしと述べた。そして、佐伯は「ナイチンゲールが偉大だったことはその行動が理路整然としていて、大きな運営力と合理性が強い」<sup>213)</sup>とナイチンゲールの行動主義的な性格を高く評価している。

ナイチンゲールが語ったとされる自分の体験と看護婦の使命にあらう。『ナイチンゲールイギリス陸軍を改革する一学習（経験）したことから学習せよ』でも報告したように、彼女の主張は、人々の健康維持に必要な原則は、一般の日常生活であれ、戦地であれ、国家が保証すべき問題であるとの見解であった。よって、日常生活を維持するための必要なあらゆる物品の管理と供給に関するシステムが秩序正しく運営されなければならない。『婦人衛生雑誌』143号（1901年（明治34年）10月号）の表紙にはナイチンゲールの像が、142号（1901年（明治34年）9月号）の表紙には、佐伯と京都同志社看病婦学校の卒業生の写真が挿入されている。

次に医療における看護師の職務に関する佐伯の考え方である。佐伯は医師としての最初の教育は熊本医学校である。次に自己の能力向上の為に、受けた医学教育はアメリカのペンシルバニア医科大学であり、その後、ドイツに1年留学し、帰国後は軍医をしていた。『阿蘇百年の人物誌』によれば、佐伯がナイチンゲールに面会する前には、医療助手としての看護婦の必要性を感じていたので面会を申し込んだと記述されている。ナイチンゲールと面会の際、佐伯は、「自分は軍医である。看護の任務がどんなものであるか、研究して日本でも採用できるものかどうか知りたい」と申し出た。ナイチンゲールは、自分の体験と看護婦の使命を教え、日本にも看護婦が必要であらうと励ました<sup>214)</sup>ようだ。佐伯が面会を申し込んだ当初の目的から考えた場合、佐伯自身の職責は軍医であったから、彼の医師としての教育や体験から考えた場合、「医療助手」として、看護婦が必要あるとしか考えていなかったろう。ナイチンゲールと面会後の佐伯は大きく変化した、「看護婦たるものは患者と医師との助手たらざる可らず」<sup>215)</sup>と述べた。佐伯の医療助手としての日本女性採用の是非に関する意見を聞きたいという当初の考え、すなわち、医療助手としての看護婦という見解から、看護婦は“患者と医師との助手たらざる可らず”との考えに大きく変換したのは、ナイチンゲールの影響であらう。

次に、看護教育における医学知識の深奥度に関する佐伯の考え方である。佐伯は、ドイツのビルロートの著作『普通看病学』を翻訳出版してが、その助言に「看病学のごとき書に解剖生理病理及び診断等を一々系統的に記載するの必要を認め

ず」<sup>216)</sup>と述べている。当時、佐伯はナイチンゲールの実践した看護教育に学問として意義を見出していた。しかし、看護婦には医師のように高い医学的知識は必要としないと述べている。ナイチンゲールは看護婦の学ぶべきABCについて述べている。そのAは病気に対する理解、Bは患者に対していかに支援するかを学ぶ事、Cは看護を受ける対象が人間である事を弁えよとの事である。

病気に対する理解についてナイチンゲールは「程度の差こそあれその性質は回復過程」<sup>217)</sup>と捉えた。つまり、病気とは、外因によって侵されたり、内因によって衰えたりする過程を癒そうとする自然の働きであるという見解である。ナイチンゲールが述べているように人には自然の回復力がある。しかし、医学であれ、看護であれ、何等かの介入があることによって更にその回復が促進されるとしたらその方がよい。その場合、看護を行う者は基礎知識として健康な人間の生物学的理解、これは人間の解剖学的知識と生理学的な知識が必要であり、これらを理解した上で各種疾患に関して病態・生理学的知識と疾患の原因等を理解する必要がある。その理解は看護をするための根拠 (evidence) として必要な知識である。医師が何故、そう診断したのか、何故、その治療を行うのか。そうした理解の上に立って、看護実践しなければ、その看護は適切ではない。

Bは患者に対していかに支援するかを学ぶ事である。つまり人々の病気に対する理解は健康ニーズの把握に、看護を受ける対象特性の理解と共にいかに看護実践をするかが究極の目的なのである。ナイチンゲールは「実践の時代の中でこそ、私たちは己の成長と正確な知識をもたらす為に与えられた素材をとおして、個人の思考や実践や人格や信頼性を発展させることができるのです。」<sup>218)</sup>と看護における実践の重要性を述べている。看護実践が適切であったか否かは、その支援を受けた患者がどれだけ回復したか、あるいは患者がどう評価するかにつく。医学が人の病気に接近するとき、看護学は病気を持った人に対して接近する。つまり、医学が肉体の病んだ一部を取り扱うのに引きかえ、看護学は病気を持った人へのケアであり、それはホーリスティックに行われるものである。

看護という職業について佐伯は、女性はその性質が温厚にして慈悲の心が深いので看護婦の仕事

に最適であるが、女性がこの性質を有していても、看護の方法を知らなければ実践できないとして看護法に関する教育の必要性について述べている。ナイチンゲールは『看護覚え書』や『看護婦と見習い生への書簡』他、多くの著作の中で看護について述べている。彼女は「Nursing is not only an art but a character 看護は技術であるのみならず人格でもある。」<sup>219)</sup>と述べた。医療の分野の中で新しい職業として、看護職を発展させるにはその独自性が主張されなければならない。ナイチンゲールは「医師という職業と看護婦という職業または芸術 (art) との類似性をあえてあげれば両者とも病人に関わらなくてはならないという点である。しかしそれでは、植木職と植物学者とは、両者共に植物に関わるが故に、その仕事に類似性があるというほうがまだましである。」<sup>220)</sup>と述べ、看護が医療の分野で独自の分野である事を主張した。そこにナイチンゲールが主張する Character という用語の重要性と先述した看護の独自性との関連がある。ゆえに、医師ほどには、との見解に至ったのであろう。

佐伯が面会をした1889年 (明治22年) 頃のナイチンゲールは、1888年 (明治21年) の『看護婦と見習い生への書簡』に見る事ができる。彼女は看護婦の登録制度や免許制度に対して終始一貫して反対の立場を取り、繰り返し免許証の弊害を主張した。そして看護婦は常に自己の中に体温計を持ち、進歩するべきであると述べた。

最後に、ナイチンゲールの看護教育の目的に女性の自立の問題がある。『ナイチンゲールと看護教育—その教育目的へのアプローチ』<sup>221)</sup>でも報告したように、彼女の看護教育の目的は、当時の女性達に不足している“徳”としての知性、倫理的な行動力、情熱というものを女性達が具有することができるようにする事、そうした徳性を具有する事によって職業を持ち、経済的に自立する事が女性達の精神を強化し、精神的な自立にも繋ると考えた。人間の基本的人権、その内の一つ“生存権”の問題もここに存在し、意志決定的な人格の意味もここに存在する。ゆえに、ナイチンゲールが行った看護教育の主要な目的には、女性達の社会への適応を促進させることでもあった。自身の観察から、現実を深く洞察した場合、多くの女性達が明日への不安から生ける屍になっていた。ナイチンゲールは、神がわれわれを生ける屍にするためにお造りになったとは考えられない。「この



ような状態は神の望みではない。ナイチンゲールは、神のなさる事は完璧であるはずだ<sup>222)</sup>との結論を見出した。彼女は、女性達に対して「まず、正当な雇用を促進し、相応な生活費と蓄えとを保障する事、そして、数の多少を問わず、ともかくも貧しいけれども節操のある女性達をできる限り保護し、自制させ高め清める事、これがはっきりした目標であり、実をもたらすことなのである。」<sup>223)</sup>と述べている。

彼女は肉体より精神が下に取り扱われることに対して憂慮していた。キリストの“山上の崇訓”はキリスト教の教義の“唯心論”(spiritualism)といわれる思想の急先峰である。ナイチンゲールは、キリスト教の“唯心論”的な考えの中にあって、ナイチンゲールはキリスト教主義思想の中で、単に“唯心論”者であっただけでなく、同時に“唯物論”者(materialism)であっただけかもしれない。“唯物論”とは精神に対する物質(material)の根源性を主張する立場である。物質から離れた靈魂・精神・意識を認めず、意識は高度に組織された物質の所産と考える立場をいう<sup>224)</sup>。“唯物論”は自然科学の発達に伴って、宗教的な権威と伝統に抵抗したマルクス主義的思想<sup>225)</sup>に多いといわれる。ナイチンゲールは女性達に対する現実的な分析を行い、問題解決のための手段として、女性達をまず教育しようという着想が生まれたと考えられるのである。京都同志社大学の創立者である新島謙の女性観は、女子教育に反映され、その精神は京都看病府学校の設置趣旨に反映されると同時に、佐伯にも影響を与えたであろう。

## ■ おわりに

本論では、ナイチンゲールに面会したとされる石黒忠恵・佐伯理一郎の生涯を検証しつつ、彼らがナイチンゲールから受けた影響について検討した。ナイチンゲールと面会したとされる石黒忠恵については、面会したという確証は得られず、佐伯理一郎についても、昭和43年に発刊された熊本日日新聞の『阿蘇百年の人物誌』から得られた情報である。『阿蘇百年の人物誌』が佐伯自身の語り及び記述からの執筆によるものかどうかの検証も、現在、執筆者が生存していないことから、この記載事実の出典を明らかにすることはできない。しかし、執筆者をよく知る阿蘇在住の嘉悦涉

氏は、掲載記事の信頼性は高いと述べている。いづれにしても石黒・佐伯両名がナイチンゲールと面会した事実については、引き続き検証するつもりである。

石黒は、明治維新という騒乱期にあって、日本の医学の向上と軍医制度の改革と同時に日本赤十字社社長として陸軍に女性による看護を導入した。ナイチンゲールと面会した事実は発見できなかったが、国際赤十字の基になっているナイチンゲールの人道主義・博愛主義的な考えは、日本赤十字社の原点でもあり、ナイチンゲール・石黒記念碑を贈呈すると同時に功労のあった看護師たちにその栄誉を与えようとしたことは、ナイチンゲールに対する尊敬の念を看護師たちと分かち合いたかったとの意思が反映されていることであると考えられた。

佐伯は、ナイチンゲールの管理能力と科学的な看護について強い関心を抱くと同時に、京都看病婦学校の運営・管理に参画しつつ、彼女のキリスト教的愛の精神を看護教育に生かそうとした。しかしながら、佐伯は、ナイチンゲールの鋭い観察から得られた社会改革、それが科学的思考(scientific thought)の過程であるとしたならば、看護実践も科学的思考の過程である。佐伯は医学にとって看護の重要性和その活動の有効性を認めていたであろうが、学問としての未成熟な段階にあって看護学の独自性とその専門領域としての賢察までには届き得なかったと考えられる。

以上から、石黒忠恵・佐伯理一郎は医師として、日本の医学の向上に努めつつ、看護教育を必要不可欠なものとして考え、発展に尽力した。彼らはそれぞれの生涯では、ある一地点にナイチンゲールという言葉を見出す者、生涯に渡ってナイチンゲールからの影響を受けたと考えられる者とそれぞれではあったが、基本的にはナイチンゲールが求めたように己が感じる意思のままに、自己の理想を貫きとおした人物たちであった。また、佐伯が、ナイチンゲールの有した独特の宗教観をどの程度理解したのかは不明であるが、少なくとも、佐伯は少ない面会時間の中で、ナイチンゲールの看護教育に対する哲学を見出したと考えられる。しかし、当時としてはかなり高度な教育を施していた同校が、佐伯の死と共に終焉を迎えたことは、大変に残念なことであった。



注

- 1) 佐々木秀美著；歴史に見るわが国の看護教育－その光と影，青山社，2005年。
- 2) 佐々木秀美著；ナイチンゲール方式による看護教育の特徴とその拡がり－教育の創造と伝承－，看護学統合研究 Vol.13, No.1, pp29-48, 2013.
- 3) 杉田暉道他著；看護史，p115，医学書院，1987年。
- 4) 江藤新平（1834-1874）；佐賀県出身。明治維新の政治家。1872年（明治5年）には司法卿に就任した。
- 5) 大久保利通（1830-1878）；島津藩士。西郷隆盛と共に討幕運動に参加，長州藩との連盟により，王政復古を実現した。1871年，征韓論派と対立，彼らの失脚により政治の中樞となった。
- 6) 木戸孝允（1833-1877）；幕末・明治期の政治家。大久保利通，西郷隆盛とともに明治維新の三傑。王政復古後，明治新政府のメンバーとして，五箇条の誓文作成に関与し，1869年（明治2年）の版籍奉還実現に中心的役割を果たした。
- 7) 岩倉具視（1825-1883）；幕末・明治時代初期の公家出身の政治家。明治新政府では右大臣となり，1871年（明治4年）遣外使節団としてアメリカ・ヨーロッパ諸国を視察。帰国後は征韓派をおさえて，内政の充実に努めた。
- 8) 大木喬任（1832-1899）；佐賀県出身。明治維新後東京府知事，民部卿・文部卿・司法卿を努める。特に三回にわたって，文部大臣を務め，学制・学校令・教育勅語などの新しい教育体制の整備に尽力した。
- 9) 学制；1872年（明治5年）に交付された我が国初の学校教育法。
- 10) 大政官の布告；大政官というのは律令制で，国政を総括する最高機関。政務審議部門として左大臣・右大臣・大納言・参議・内大臣が加わり公卿と呼ばれる。その事務局として少納言・外記・史生，行政執行・命令部門として弁官（左右の大中小弁）の三部門によって構成されていた。1868年（明治元年）政体書により設置された最高官庁を言う。学制の趣旨声明書（太政官布告第214号）。文部省はここに学制を定めて従来の民衆の学問に対する認識を改めさせ，一般の人々に等しく学問を授けることを計画した。勉強してこそはじめて立身出世ができるのであると述べている。
- 11) 板垣退助（1837-1919）；明治時代の政治家。自由党の創立者。1874年（明治7年），後藤象二郎等と“民選議員設立建白書”を政府に提出し，自由民権運動をおこした。
- 12) 長与専斎（1831-1902）；16歳で緒方洪庵の適塾に入門。1871年（明治4年）文部省が設置されたとき，ドイツにおける医療制度を視察し，医制76条の構想を練り，1874年（明治7年）交付した。1873年（明治6年）には文部省医務局長に就任。医務局が内務省に移管されたとき，衛生局と改め，初代衛生局長に就任した。
- 13) 土岐源頼徳（1843-1911）；明治時代の軍医。1869年（明治2年），大学准少寮長となり，長谷川泰・石黒忠恵らと学生を監督し，1874年（明治7年），陸軍軍医に任ぜられた。1879年（明治10年）西南戦争に従軍。1894年（明治27年），日清戦争に従軍した。
- 14) 石黒伴忠恵（1845-1941）；本論の主要人物の一人石黒忠恵のことである。土岐源頼徳，長谷川平泰の姓名の中央に源・平の文字が据えられているように，当時，自身の家門の氏・素性を表現する方法の一つとして採用されていたようだ。石黒は自身が養子の立場であり，源・平いずれでもなく，両者の中間的立場であることを範で示したかったと推測される。
- 15) 長谷川平泰（1842-1912）；明治期の医学者であると同時に政治家でもある。西洋医養成のために済生学舎を設立した。1869年（明治2年）の頃は東京帝国大学医学部付属病院東校の少助教になっている。
- 16) 婦人慈善会；伊東博文夫人，井上こわし夫人，森有礼夫人，有須川の宮城仁親王妃薫子夫人等。
- 17) 高木兼寛（1849-1920）；宮崎県生まれ，1868年（明治元年），東北征討軍に軍医として加わった後，鹿児島藩立開成学校に入学してイギリス人医師，ウィリスに学んだ。1872年（明治5年）より海軍に出し，1875年（明治8年）からイギリス，セント・トマス病院に留学する。帰国してからは東京海軍病院院長を務めながら，1881年（明治14年）に成医会を結成，成医会講習所を設立（現在

- の東京慈恵会医科大学の前身) 1882年(明治15年)海軍省医務局長となり、脚気病対策に取り組んだ。1888年(明治21年)我が国最初の医学博士となった。
- 18) 佐々木秀美著；国定教科書におけるナイチンゲールの取り扱いに関する若干の考察，総合看護，Vol.36 No.3, pp67-74, 2001年。
  - 19) 曲直瀬道三(1507-1595)；道三は医学を仏教から分離し、儒教の精神を医道の根本精神とした。
  - 20) 曲直瀬道三著，北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所温知会有志編訳；啓迪集，思文閣出版，1995年。
  - 21) 曲直瀬道三著；前掲書20)，p13。
  - 22) 杉田玄白(1733-1817)；近代医学の道を開いた。解体新書はドイツ人クルムス(J. Kulmus)の解剖書(Anatomische Tabelle)の蘭訳本(1734年版)を日本訳にした。
  - 23) 緒方洪庵(1810-1863)；蘭学者であり、医学者である。備中足守藩(現在の岡山県)の出身。1826年(文政9年)大阪の中天游の塾「思々斎塾」で西洋医学の基礎を学んだ。1836年(天保7年)に蘭学を学ぶため長崎に遊学した。
  - 24) ヨハネス・ニーマン(Johannes Niemann 1797-不詳)；長崎オランダ出島商館長。医師でもあった。
  - 25) 福沢諭吉(1834-1901)；慶応義塾大学の創始者。1878年(明治11年)ごろから自由民権運動に巻き込まれた。著作に『学問のすすめ』がある。教育者としての彼の精神は独立自尊である。
  - 26) 大村益次郎(1824-1869)；代々医の家系。緒方洪庵の適塾に学び、医業を開いた後、幕府の講武所教授となる。その後、萩藩で蘭学を教え、西洋学兵学教授になった。
  - 27) 佐野常民(1822-1887)；日本赤十字社の創立者。1877年(明治10年)、西南の役では、新しい武器の攻防によって多くの兵が野戦に倒れた。この時、ヨーロッパで行われている赤十字と同様の救護団体を作ろうと思い立った。
  - 28) ポンペ・フォン・メーデルフォルト(Pompe van Meerdervoort 1829-1908)；ベルギー出身のオランダ軍医。海軍伝習所講師として1857年(安政4年)来日した。
  - 29) 伊東玄木(1801-1871)；幕末の蘭方医。1858年(安政5年)、江戸お玉が池種痘所を開設。1861年(文久元年)より、西洋医学所の取締役を務めた。
  - 30) 松本良順(1832-1907)；江戸時代後期の幕臣。明治期の官僚。男爵。初代陸軍軍医総監や貴族院の勅撰議員などを務めた。父は佐倉藩藩医で順天堂を営む佐藤泰然。外務大臣の林薫は実弟。後に幕医の松本良甫の養子となる。
  - 31) 岩佐純(1836-1912)；幕末－明治時代の医師。
  - 32) 相良知安(1836-1906)；佐賀藩出身の漢方医。佐倉順天堂で佐藤泰然、長崎精得館でオランダ人医師アントニウス・フランシスカス・ボードイン(Anthonius Franciscus Bauduin 1820-1885)より医学を学ぶ。明治政府に、イギリス医学ではなくドイツ医学の採用を進言しその説が採用される。明治初期の医療行政において文部省医務局長などの役職を経験したが、後年頑迷な性格により世に受け入れなくなり、官界を去った。64歳で勲五等瑞宝章を授与された。
  - 33) 石神良策(1821-1875)；幕末－明治時代の蘭医。薩摩(さつま)鹿児島藩医。高木兼寛は彼から初期の医学を学んだ。
  - 34) ウィリアム・ウィリス(William Willis 1837-1894)；薩摩藩がイギリス公使を通して招いたイギリス人外科医。
  - 35) 山内容堂(1827-1872)；土佐藩15代当主。藩主の座に就いた容堂は門閥・旧臣による藩政を嫌い、革新派グループ「新おこぜ組」の中心人物、吉田東洋を見出して起用した。容堂は福井藩主・松平春獄、宇和島藩主・伊達宗城、薩摩藩主・島津斉彬とも交流を持ち幕末の四賢侯と称された。
  - 36) 松平春獄(1828-1890)；第16代越前福井藩主。明治時代の政治家でもある。維新後の新政府では1868年(慶応4年)に内国事務総督。1869年(明治2年)に民部官知事、同年民部卿、大蔵卿を兼任。大学別当・侍読に就任。同年9月26日に正二位に叙せられた。1870年(明治3年)に政務を退く。
  - 37) 厚生省医務局編；医制百年史，p21，ぎょうせい，1976年。
  - 38) グイド・ヘルマン・フリドリッヒ・フェルベック((Guido Herman Fridolin Verbeck, 或いは

- Verbeek 1830-1898)；日本ではフルベッキと呼ばれるオランダの法医学者・神学者・宣教師。オランダ・ザイスト市出身。米国オランダ改革派教会から布教のため上海から長崎に派遣されたが、明治維新前の日本では宣教師として活動することができず、私塾で英語などを教え生計を立てていた。その後、幕府が長崎につくった英語伝習所（フルベッキが在籍した当時は洋学所、済美館、広運館などと呼ばれた）の英語講師に採用された。大隈重信、副島種臣と親交があった。
- 39) ベンジャミン・カール・レオポルド・ミュルレル (Benjamin Carl Leopold müller 1824-1893)；ドイツ生まれ。1871年(明治4年)来日、大学東校の学制の制定に尽力した。外科学・解剖学・生理学・神経学・薬局学などを教授、東京帝国大学医学部におけるドイツ医学の基礎を築いた。
- 40) テオドル・エドワルド・ホフマン (Theodor Eduard Hoffmann 1837-1894)；明治初期に来日したドイツ人医師。ドイツ海軍軍医少尉。東京帝国大学で内科・病理・薬物学を担当した。
- 41) エルビン・フォン・バルツ (Erwin von Balz 1849-1913)；1872年(明治5年)にライプチヒ大学医学部を卒業。1876年(明治9年)、東京医学校(後の東京帝国大学医科大学、東京大学医学部)の内科医学正教授として来日。以後、1902年(明治35年)まで在職し、日本の近代医学の基礎づくりに貢献した。
- 42) ジュリアス・カール・スクリバ (Julius Karl Scriba 1848-1905)；明治期に来日したドイツの外科医。ハイデルベルク大学で医学・植物学を学び、1881年(明治14年)に来日、東京大学医学部の外科担当外人教師となる。
- 43) 西郷隆盛 (1827-1877)；島津藩藩士。大久保利通と共に第一次長州征伐に参加、軍略家として注目される。その後、薩長同盟、鳥羽伏見の戦い、大政奉還、江戸無血開城、戊辰戦争で常に主役として活躍する。
- 44) 高木喜寛著；高木兼寛伝、三秀社、1922年。
- 45) 松田誠著；高木兼寛伝、講談社、1990年。
- 46) ウィリアム・アンダーソン (William Anderson 1842-1900)；イギリス人軍医。1879年(明治12年)の著作に『看病要法』がある。
- 47) ジェームズ・カーティス・ヘボン (James Curtis Hepburn 1815-1911)；1859年(安政6年)に医師として、新約聖書の日本語訳を行ったブラウン (S.R Brown 1810-1881)、明治維新政府の顧問を務めたフルベッキ (Verbeck, Guido Herman 1830-1898) と共に来日。それぞれ、新時代の日本を背負っていく人材の育成を目指して塾を開いた。1877年(明治10年)にはブラウンが設立した塾を中心に東京一致神学校と、ヘボン塾の後身である東京一致英和学校、ヘボン塾で学んだ服部綾雄の英和予備校が合併し、明治学院となった。ヘボンはそこの初代総理(学院長)になった。
- 48) ルイ・パスツール (Louis Pasteur 1822-1895)；フランスの細菌学者である。彼は“近代細菌学の父”と呼ばれた。ワクチンによる予防接種を創始した。又、肺炎菌やレンサ菌の発見も彼の業績である。
- 49) ロード・ジョセフ・リスター (Lord Joseph Lister 1827-1912)；リスターは“近代外科学の父”と呼ばれ、石炭酸を消毒液に使用して外科手術法を開拓し、術後の感染防止に貢献した。
- 50) ロベルト・コッホ (Robert Coph 1843-1910)；19世紀から20世紀のドイツの細菌学者。1866年(慶応2年)にゲッティンゲン大学を卒業後、1872-1880年(明治5-明治13年)、ウォルシュタイン地方の医官として細菌学の研究に従事。1876年(明治9年)、炭疽菌の分離・純粋培養に成功。1882年(明治15年)、結核菌を発見、1884年(明治17年)にはコレラ菌の純粋培養に成功した。1885年(明治18年)ベルリン大学衛生学教授に就任。1890年(明治23年)、ツベルクリンを創製した。北里柴三郎はコッホの弟子である。
- 51) アーマウアー・ハンセン (Gerhard Henrik Armauer Hansen 1841-1912)；ノルウエーの医師。ハンセン病の感染菌を発見し、その後、各国で予防法が確立した。
- 52) 厚生省医務局編；前掲書37)。
- 53) 石黒忠恵著 (1936年)；懐旧九十年、大空社、1994年。
- 54) 石黒忠恵著；懐旧90年、岩波書店、1983年。
- 55) 石黒忠恵著 (1936年)；前掲書53)、p24。



- 56) 石黒忠恵著 (1936年)；前掲書53)，pp43-44.
- 57) 佐久間象山 (1811-1864)；松代藩士であり，兵学者・思想家。象山は兵学のみならず，西洋の学問そのものに大きな関心を寄せるようになる。ガラスの製造や地震予知器の開発に成功し，更には牛痘種の導入も企図していた。1853年（嘉永6年）にペリーが浦賀に来航した時象山は，視察として浦賀の地を訪れている。1854年（嘉永7年），再び来航したペリーの艦隊に門弟吉田松陰が密航を企て，失敗するという事件が起きた。象山も事件に連座して伝馬町に入獄する羽目になり，更にその後は1862年（文久2年）まで，松代での蟄居を余儀なくされる。1864年（元治元年），象山は一橋慶喜に招かれて入洛，慶喜に公武合体論と開国論を説いた。京都で暗殺された。
- 58) 高木喜寛著；高木兼寛伝，三秀社，1922年。
- 59) 松田誠著；高木兼寛伝，講談社，1990年。
- 60) 三宅秀 (1848-1938)；肥前（熊本県）で代々医業を行ってきた三宅良斎（みやけ ごんさい）の長男として江戸本所で生まれた。三宅良斎は，お玉が池種痘所（現東京大学医学部）の創設に加わった人物。1857年（安政4年）蘭学を習い始め，1863年（文久3年）遣欧使節に随行した。1864年（元治元年）欧州より帰国後，横浜のヘボン塾で英学を学び，元アメリカ海軍医 Alexander M. Vedder の助手となり医学を学んだ。1870年（明治3年）東京大学へ出仕，中助教，大助教，文部少教授を歴任。1874年（明治7年）東京医学校長心得となる。1881年（明治14年）東京大学医学部長，医科大学教授，医科大学長を歴任。1888年（明治21年）東京大学初の医学博士になる。1891年（明治24年）貴族院議員となり，1903年（明治36年）東京大学初の名誉教授となった。
- 61) 佐藤尚中 (1827-1882)；幕末から明治初期の蘭方医。下総の国小見川藩医の山口甫僊の次男として生まれる。1842年（天保13年），江戸四谷の医者安藤文沢に蘭方医学を学ぶ。文沢の勧めで和田泰然（のち佐藤泰然）の「和田塾に」入門。1853年（嘉永6年），佐藤泰然の養子となる。1860年（万延元年），長崎でボペ・ファン・メーデルフォールトにオランダ医学を学ぶ。1867年（慶応3年），佐倉藩に「佐倉養生所」開設。1868年（慶応4年）戊辰戦争のため閉鎖。その後，明治政府の要請により「大学東校（現，東京大学医学部）」に勤め大博士となる。1873年（明治6年），私立の「順天堂医院」開設した。
- 62) 永井久一郎 (1851-1913)；尾張藩出身，永井荷風の父親。アメリカ留学後官吏として出仕。1884年（明治17年）ロンドン万国衛生博覧会に事務官として出張。1886年（明治19年）帝国大学書記官，文部大臣秘書官。1890年（明治23年）から文部省書記官，1897年（明治30年）日本郵船上海支店長となる鷺津毅堂の門下で漢詩人であった。
- 63) 荻野吟子 (1851-1913)；日本最初の女医の医師試験合格者。16歳で結婚，二年後夫から性病を移され，離婚。順天堂医院に2年間入院し，治療を行う。その後，自ら医師になることを決意，1873年（明治6年）漢方医井上頼罔に入門。1875年（明治8年）東京女子師範学校を経て，1879年（明治12年）私立医学校の好寿院に進学。1882年（明治15年）卒業した。医師免許に合格した後，本郷湯島に産婦人科荻野医院を開業，まもなく下谷に移り治療に専念する。海老名弾正から洗礼を受け，キリスト教徒になる。その後，日本基督教婦人矯風会風俗部長としても活躍する。
- 64) 村上信彦著；明治女性史，p227，講談社，1876年。
- 65) 村上信彦著；前掲書64)，p242。
- 66) 石黒忠恵著 (1936年)；前掲書53)，p195。
- 67) 小松宮彰仁親王 (1846-1903)；明治時代の軍人。伏見宮那家親王の第八子。1868年（明治元年）軍事総裁，外国事務総裁，海陸軍務総裁，兵部卿を歴任また，会津征討総督に任ぜられた。1870年（明治3年）英国に留学。1874年（明治7年），陸軍少将となり，佐賀の乱，西南戦争に功績あり。1880年（明治13年）陸軍中將に昇進。1882年（明治15年）小松宮彰仁と改めた。1890年（明治23年）陸軍大将となり，日清戦争では征清大総督を命ぜられた。1902年（明治35年）名代として英国皇帝の戴冠式に参列するが，この間に日本赤十字社・大日本農会など多くの団体の総裁を務めた。
- 68) 石黒忠恵著 (1936年)；前掲書53)，p226。
- 69) 北里柴三郎 (1852-1931)；明治から大正にかけての細菌学者。男爵。1875年（明治8年）東京医学

- 校に入学、卒業後の1885年（明治18年）ドイツに留学してコッホに師事した。1889年（明治22年）破傷風菌の純粋培養に成功し、翌年には血清の療法を発見。1894年（明治27年）にはペスト菌も発見した。1914年（大正3年）伝染病研究所が内務省から文部省に移管される事に反対して、独自に北里研究所を設立した。1916年（大正5年）慶応大学医学部創設に尽力し、医学部長・付属病院長になった。1917年（大正6年）勅撰貴族院議員、日本医師会初代会長。
- 70) ルドルフ・ウィルヒョウ (Rudolf Virchow 1821-1902)；ドイツの医学者、政治家、人類学者。彼の病理学的な分野における功績は“ウィルヒョウの転移”としても残っており、人体の病理学的研究に著名な業績を残した事で有名。
- 71) 佐伯理一郎日記；1897年、1899年～1902年、京都同志社資料館所蔵。
- 72) 石黒忠恵著；前掲書54), p296。
- 73) 大山捨松 (1860-1919)；岩倉使節団とともにわが国最初の女子留学生。ニューヘブンの宣教師レオナルド・バーコン夫妻の家庭に入って教育を受けた。卒業後、ニューヘブンの市民病院で看護学の勉強をした。帰国後、陸軍大臣大山巖と結婚した。日本赤十字社に働きかけ日本篤志婦人会を発足させた。東京帝国大学の総長になった山川健次郎は実兄である。
- 74) 石黒忠恵著 (1936年)；前掲書53), p4。
- 75) 桂太郎 (1848-1913)；長州藩士、陸軍軍人、政治家。第11・13・15代内閣総理大臣。公爵。台湾協会学校（現拓殖大学）創立者初代校長。毛利家の庶流で重臣であった桂家の出身で、長州閥で山縣有朋の直系。日露戦争で日本を勝利に導いた宰相である。
- 76) 石黒忠恵著 (1936年)；前掲書53), p367。
- 77) アンリ・デュナン (Jean Henri Dunant 1828-1910)；世界赤十字の創立者。スイス人。イタリアとオーストリアにおきた戦争でソルフェリーノの激戦とクリミア戦争における救護活動を目撃した。人道主義の立場から、戦傷者救護の国際的機関を作ることを提案した。
- 78) アンリ・デュナン著、寺家村博訳；ソルフェリーノの記念、p165、メジカルフレンド社、1983年。
- 79) 佐々木秀美著；ナイチンゲールイギリス陸軍を改革するー学習（経験）したことから学習せよ、看護学統合研究 Vol.13, No.1, pp29-48, 2011。
- 80) トーマス・ロングモア博士 (Thomas Longmore MD)；英国陸軍医学校の外科学教授。クリミア戦争中は外科医として従軍していた。ナイチンゲールはクリミア従軍の経験から、戦時中における多数の兵士の死亡は陸軍の怠慢であると考えていた。彼女が戦後すぐに行ったのは陸軍の改革である。彼女はビクトリア女王に謁見した際に、勅撰委員会の設立を進言し、4つの小委員会が発足した。その中の一つが医学校の設立である。『ナイチンゲールの生涯』クック著。
- 81) Zachary Cope (1958), Florence Nightingale and The Doctors, (小池明子他訳；ナイチンゲールと医師達, p117, 本看護婦協会出版会, 1979年。
- 82) Zachary Cope (1958); 前掲書81), p11。
- 83) Cecil Woodham-Smith (1950), Florence Nightingale, (武山満知子他訳；フロレンスナイチンゲールの生涯, 下巻, p474, 現代社, 1987年。)
- 84) 時事新聞, 1882年（明治15年）11月22日付け。
- 85) 大山巖 (1842-1914)；鹿児島県出身、西郷隆盛の従兄弟。明治維新政府で陸軍卿、陸軍大臣。近代日本陸軍の建設に貢献した。妻が出産後に産褥熱によって死亡したため残された子の育児と教育のために捨松と結婚した。
- 86) 橋本綱常 (1845-1909)；1872年（明治5年）ドイツに留学。1877年（明治10年）帰国。陸軍軍医監、東京大学医学部教授となった。1884年（明治17年）ヨーロッパに視察に行った際、赤十字事業を調査し、博愛社病院の設立に尽力した。1886年（明治19年）初代院長となり、日本赤十字社病院の看護婦養成事業を推進した。
- 87) 吉川龍子著；高山盈の生涯, p64, 蒼生書房, 1875年。
- 88) 松方正義 (1835-1924)；元老・政治家。薩摩藩出身。島津久光につかえ、その関係で大久保利通に求められた。1885年（明治18年）、内閣制度によって初代大蔵大臣になる。1891年（明治24年）に内

閣を組閣した。

- 89) 吉川龍子著；日赤の創始者 佐野常民，吉川弘文館，2001年。
- 90) 日本赤十字社編；日本赤十字社史續稿上・下巻，小林印刷所，1929年。
- 91) 日本赤十字社；看護婦養成資料稿，1927年。
- 92) 日本赤十字社；石黒子爵講演－日本赤十字社の揺籃時代，1923年。
- 93) 日本赤十字社中央女子短期大学編；日本赤十字社中央女子短期大学90年史，日本赤十字社中央女子短期大学，1980年。
- 94) 亀山美知子著；近代日本看護史 日本赤十字社と看護，ドメス出版，1997年。
- 95) 東京日日新聞，1888年（明治21年）2月21日付け。
- 96) テオドール・フリードナー（Paster Theodore Fliedner 1800-1864）；プロテスタントの牧師。ドイツのカイゼルスウエルトに赴任した際に，人々が経済的に苦境に陥っていたため，救済資金を求めてイギリスに足を伸ばした。そこでエリザベス・フライ女史の女囚保護事業活動を知ってドイツに広めようとした。その一環として1836年に看護婦の養成所も含めたカイゼルスウエルト学園を創立した。
- 97) Florence Nightingale (1851), The Institution of Kaiserswerth on the Rhine for the Practical Training of Deaconesses, (湯慎ます他訳；ナイチンゲール著作集第一巻，カイゼルスウエルト学園によせて，現代社，1983年。)
- 98) 佐々木秀美著；ナイチンゲールの看護観－その目的実現のための教育方法－Nursing is not an Art but a Character, 看護学統合研究 Vol.14, No.1, pp46-66, 2012.
- 99) Lucy Ridgely Seymer, A General History of Nursing, (小玉香津子訳；看護の歴史, p179, 医学書院, 1978年。)
- 100) フレデリック皇后（The Empress Fredrick 1840-1901）；ビクトリア女王の長女で名前をビクトリア・アデライド・マリー・ルイズというプロシアの王ギョウム一世の長子フレデリックと結婚した。後のドイツ皇帝カイゼルの母親。
- 101) Frederick Ponsonby, ed (1928), Letters of the Empress Frederick, (望月百合子訳；ビクトリア女王の娘，ゾーオン社，1993年。)
- 102) オットー・ビスマルク（Otto Eduard Leopold von Bismarck 1815-1898）；ドイツの政治家。鉄血宰相と言われた。プロシア王ウイルヘルム1世を皇帝とするドイツ帝国を建設。自ら初代首相となり，産業を保護し，社会主義運動をおさえながら社会保障を進めた。
- 103) 高山盈（1843-1903）；藤堂家守位役の武士の娘として藤堂家下屋敷で生まれた吉岡盈は，福山藩士高山宣直の妻となり明治維新を迎えた。1886年（明治19年）から華族女学校で津田梅子や下田歌子と共に教鞭をとっていた。1889年（明治22年）には仙台の師範学校に赴任，1894年（明治27年）には日本赤十字社病院の看護婦監督に任用された。
- 104) 吉川龍子著；前掲書87), p186.
- 105) 吉川龍子著；前掲書87), p170.
- 106) 坪井良子編；日本看護名著集成6巻，日本赤十字社『日本赤十字社看護教程』，pp4-5，日本看護協会出版会，1988年。
- 107) 石黒忠恵著；前掲書54), pp279-280.
- 108) 日本赤十字社編；日本赤十字社史續稿上巻，pp274-277，小林印刷所，1929年。
- 109) 小澤武雄（1844-1926）；福岡県小倉出身の日本陸軍軍人。1878年（明治11年）陸軍少将, 1885年（明治18年）陸軍中將に任命され, 1887年（明治20年）男爵の爵位を授与された。貴族院議員（1890-1926年まで）で日本赤十字社副社長を務めた。
- 110) ヘンリー・ピ・カーター（Henry Bonaham Carter 1827-1921）；このヘンリー・ピ・カーターとは恐らくナイチンゲールの従兄弟のヘンリー・ボナハム・カーターのことであろう。彼は1861年（文久元年）から1899年（明治32年）までナイチンゲール基金の書記官として働き，1914年まで同基金の評議員をしていた。



- 111) Cecil Woodham-Smith (1950)；前掲書83)。
- 112) Cecil Woodham-Smith (1950)；前掲書83)，pp384-387。
- 113) Cecil Woodham-Smith (1950)；前掲書83)，p385。
- 114) 荻原タケ(1873-1936)；東京都五日市出身。1896年(明治29年)日本赤十字社看護婦養成所を卒業。日清・北清・日露戦争に従軍。1909年(明治42年)第二回国際看護婦協会大会に参加。1910年(明治43年)日赤病院看護婦監督になった。第一回ナイチンゲール賞を受賞。1929年には日本帝国看護婦協会の初代会長に選ばれた。
- 115) 杉田暉道他著；前掲書3)，p115。
- 116) 石黒忠恵著；前掲書54)，pp272-273。
- 117) Florence Nightingale (1888), To the nurses and probationers trained under the "Nightingale Fund" (湯槇ます他訳；ナイチンゲール著作集第三巻，看護婦と見習い生への書簡，p85，現代社，1985年。)
- 118) Harriet Martineau, British History and Military Reform, Vol.6, England and her Soldiers, p226, Edited by Deborah Anna Logan Pickerring & Chatto, 2005.
- 119) Harriet Martineau；前掲書118)，p236。
- 120) ハリエット・マーティノー (Harriet Martineau 1802-1876)；英国の女流小説家，経済学者。デイリー・ニュースの主筆をしていた。彼女は情報や知識を小説の形で出すことを思いつき，数多くの物語を書いて政治や経済や救貧院の話などを解りやすく解説して好評を得た。『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』セシル・ウーダム・スミス著より。
- 121) Harriet Martineau；前掲書118)，p95。
- 122) 『平時および戦時の陸軍病院へ女性による看護を導入する件に関する補助覚え書 (Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals)，湯槇ます他は『女性による陸軍病院の看護』と訳している。
- 123) シドニー・ハーバート (Sidney Herbert 1810-1861)；クリミア戦争当時の戦争大臣。ナイチンゲールの生涯のパートナーであり，良き理解者，協力者である。名門ペンブルック伯爵家に生まれ，政治家となった人物。1852年(嘉永5年)－1855年(安政2年)，1859(安政6年)－1860年(万延元年)に陸軍大臣を務め，ナイチンゲールの改革を推進した。しかし，激務のため病気となり，公務からの引退を希望するが，ナイチンゲールはそれを許さなかったといわれている。辞職後に病死。
- 124) ジョン・サザランド博士 (Dr. John Sutherland 1808-1891)；保健局の衛生顧問。
- 125) アーサー・ヒュー・クラフ (Arther Hugh Clough 1819-1861)；英国の詩人。ラグビー校で学んだ後，オックスフォード大学で学んだ。ナイチンゲールの友人であり，彼女の従妹ブランチと結婚。ナイチンゲールの仕事を手伝った。
- 126) 石黒忠恵著；前掲書54)，p242。
- 127) 阿蘇百年の人物誌；熊本日日新聞，昭和43年9月9日付。
- 128) 佐伯よし子著；阿蘇が峰のけむり－明治の開業医・佐伯理一郎小伝 私版，1971年。
- 129) 本井康博著；佐伯理一郎と内村鑑三，pp68-72，同志社談叢，1981年。
- 130) 本井康博著；佐伯理一郎－同志社医学の支柱，pp123-144，同志社人物誌98，1994年。
- 131) 阿知波五朗著；看護学は学として成り立ちうるか，看護教育，pp546-553，Vol.16，No.9，1975年。
- 132) 渡辺昭彦著；オスラーの教え子 佐伯理一郎の人と業績(上)(下)，日本医事新報，No.3947，pp39-42，No.3948，pp47-49，1999年。
- 133) 佐伯理一郎関係資料；熊本県阿蘇市在住で佐伯理一郎関係の研究を行っている嘉悦渉が収集した資料。
- 134) 浜田玄達 (1854-1915)；日本産婆学の開拓者。東京大学産婦人科初代教授。わが国産婦人科学の始祖。肥後国宇土郡大岳村に生まれ。熊本古城医学校に学び，東京大学医学部に進む。1880年(明治13年)，熊本医学校の教授。後に，附属病院の校長と病院長を兼任。1884年(明治17年)，自費でドイツに留学，内科学を専攻していたが文部省留学生として産婦人科学を学ぶ機会が与えられた。1888年(明治21年)帰国直後，東京大学産婦人科主任教授の任に就いた。専門家不在で，わが国の

- 産婦人科学界は暗黒時代を迎えていた中、彼の手術は全て成功し、学界の期待に応えた。1899年（明治32年）、浜田産婦人科病院と産婆学校を発足させ、1902年（明治35年）、日本産婦人科学会が創設され初代会長に就任した。
- 135) 熊本バンド；明治期のプロテスタント派の源流の1つである。熊本洋学校に招かれたアメリカ人教師リロイ・ランシング・ジェーンズ（Leroy Lansing Janes, 1837-1909）は、道義的国家の確立のために、神の信仰に生きる自主的な個人を形成することにあつた。洋学校は1876年（明治9年）に閉鎖されたが、小崎弘道、海老名弾正、徳富蘇峰ら青年達の多くは新設間もない同志社英学校に転校し、同志社の大きな位置を占めるようになった。
- 136) 徳富蘇峰（1863-1957）；日本のジャーナリスト・歴史家・政治家・評論家。本名は徳富猪一郎。熊本洋学校から同志社に転向したあと、『第19世紀日本の青年及其教育』などで論壇デビューを果たし、1890年（明治23年）には『国民新聞』を刊行。日清戦争後の三国干渉に衝撃を受け、平民主義から強硬な国権論・国家膨脹主義に転じた。1897年（明治30年）、松方内閣の内務省勅任参事官に就任し、従来の反政府の立場からの変節を非難されたが有力新聞を基盤として政治家と交際し、政官界に影響力を持った政客として肯定的な評価もある。
- 137) 海老名弾正（1856-1937）；伝道師、神学者、思想家。熊本洋学校に学び、ジェーンズ（前掲136参照）から洗礼を受ける。同志社神学校卒業後は群馬県安中教会牧師となり、以後、前橋教会、本郷教会、熊本英学校、熊本女学校、日本基督教伝道会社、神戸教会を経てふたたび本郷教会牧師となり、晩年には第8代同志社総長をつとめた。彼の神学は進歩的・自由神学的〔新神学〕の強い影響を受け、信仰理解をめぐって、正統主義信仰の植村正久福音主義論争を戦わせ、教界内外の注目を集めた。彼の思想の神道的・武士道的・国粹主義的性格は、日露戦争に対する積極的肯定にまでつながっている。
- 138) 佐伯よし子著；前掲書128），p5.
- 139) 佐伯よし子著；前掲書128），p12.
- 140) 小崎弘道（1856-1938）；日本の牧師。同志社第2代社長（現総長）。熊本藩士小崎次郎左衛門の5人兄弟の次男として肥後の国（現在の熊本市）に生まれる。藩校時習館を経て1871年（明治4年）熊本洋学校に入学。熊本洋学校では海老名弾正らと出会う。熊本洋学校閉鎖により1876年（明治9年）同志社に転入学、新島襄と出会う。日本組合基督教会会長、日本基督教会連盟会長などを務めた。神学者で牧師の小崎道雄は長男。
- 141) ウィリアム・コグスウェル・ホイットニー（William Cogswell Whitney 1825-1882）；エール大学卒業後、ニューアークに商業学校を創設し、その校長となった。この学校で最初に教育を受けた富田鉄之助は外務省勤務から東京府知事になった。日本に商業教育機関を設立したいと考えた森有礼は、富田の推薦を受けてホイットニーに依頼をした。長男のウィリアムはペンシルバニアでの医学教育後、日本で赤坂病院を開設、長女のクララは勝海舟の三男と結婚をした。
- 142) 勝海舟（1823-1899）；江戸本所生まれ。島田虎之助から剣、永井青崖から蘭学を学び、蘭学の塾をひらいた。その後、薩摩（鹿児島県）藩主、島津斉彬（しまづ なりあきら）と親交を持ち、1853年（嘉永6年）ペリー来航時には幕府の翻訳係りとして活躍した。長崎に海軍伝習所で航海術などを学び開国論者になった。海舟はサンフランシスコから帰国後、幕府の海軍奉行に抜擢された。大政奉還後、江戸城無血開放を西郷隆盛と話し合っ成し遂げた。1873年（明治6年）、明六社に参加。1887年（明治20年）に哲学館（現：東洋大学）の創設に協力した。また、専修学校（現：専修大学）の繁栄にも尽力した。
- 143) 山岡鉄舟（1836-1888）；幕臣で明治天皇の侍従、一刀正伝無刀流剣術の開祖。明治維新の時に単身官軍の営所に乗り込み、西郷隆盛と会見して勝海舟との会談の機会を作り、江戸を戦火から救った。1869年（明治2年）新政府に起用され、静岡県権大参事、茨城県参事などを行った。
- 144) 杉田玄端（1818-1889）；杉田玄白の弟子。17歳で杉田立郷の門下生となり、蘭学医術を修めた。1838年（天保9年）、杉田家の養子となり、名前を玄端と改める。1845年（弘化2年）、28歳の時に分家して四谷に開業したが宗家玄白に子供がいなかったので宗家を継ぎ、幕府に仕える。後に沼津

- 兵学校・陸軍医学所を興した。これは沼津病院、駿東病院の前身となった。
- 145) 内村鑑三 (1861-1930)；明治から大正期の教育者。キリスト教徒。教育勅語発布後に不敬事件を起こして辞職した。その後、著作業に専念、平和主義者として多くの人々に感化を及ぼした。
- 146) 新島襄 (1843-1890)；明治期の啓蒙思想家及び教育者。アリカン・ボードの宣教師。同志社大学を設立した。
- 147) 新渡戸稲造 (1862-1933)；農学者、教育者。岩手県盛岡市生まれ。13歳で東京英語学校に学んだ。その後、札幌農学校に内村鑑三らと共に入学。その後、東京大学へ進学。進学後、私費でアメリカに留学ジョンズ・ホプキンス大学に入学。この頃までに稲造は伝統的なキリスト教信仰に懐疑的になっており、キューカー教徒たちとの親交を通してメリー・エルキントンと結婚。その後、札幌農学校助教授に任命された。ジョンズ・ホプキンス大学を中途退学して官費でドイツへ留学。ボン大学などで聴講した後、ハレ大学より博士号を得て帰国し、教授として札幌農学校に赴任する。この間、新渡戸の最初の著作『日米通交史』がジョンズ・ホプキンス大学から出版され、同校より名誉学士号を得た。だが、札幌時代に夫婦とも体調を崩し、カリフォルニアで転地療養中に『武士道』を英文で書きあげた。1900年（明治33年）に『武士道』の初版が刊行されると、各国語に訳されベストセラーとなった。その後、東京帝国大学教授、拓殖大学学監、東京女子大学学長などを歴任した。
- 148) ウィリアム・オスラー (William Osler 1849-1919)；カナダ生まれの医学者、内科医。オスラーは初め、トロント大学で聖職者を目指したが、のちに自然科学に対して強い関心を抱くようになり、医学へ転向した。トロント大学医学部に入学後マギル大学医学部に転学し、卒業後、英国・ドイツ・オーストリアなどへの留学中にきわめて広範な研究を行い、後の経歴の基礎を築いた。マギル大学、ペンシルバニア大学、ジョンズ・ホプキンス大学、オックスフォード大学の教授を務め、カナダ、米国、英国の医学の発展に多大な貢献をした。また、医学教育にも熱意を傾け、今日の医学教育の基礎を築いた。
- 149) 本井康博著；佐伯理一郎－同志社医学の支柱、同志社人物誌98, p71, 1994年。
- 150) 佐伯理一郎書簡；在独沸英時代信書、(1889年7月22日～1890年10月23日)全22通、京都同志社資料館所蔵。
- 151) 熊本日日新聞；前掲書127)。
- 152) 熊本日日新聞；前掲書127)。
- 153) 佐伯理一郎著；京都看病婦学校五十年史、内外出版、1936年。
- 154) ジョン・カッティング・ベリー (John Cutting Berry 1847-1936)；アメリカン・ボード宣教医。1871年（明治4年）にフィラデルフィアのジェファースン医科大学を卒業。1872年（明治5年）来日。神戸市で貧しい人たちの施療に当たった。1883年（明治16年）、京都に移り医学校、病院、看護婦学校の設立計画に参画した。
- 155) リンダ・リチャーズ；(Linde Richards 1841-1930)；ボストン市立病院の看護師であった。看護を習おうと病院にいったが、その内容に失望し、再度教育を受けることを決意、1872年（明治5年）に一年課程のニュー・イングランド病院付属看護師養成所に入学した。卒業後、ベルビュー病院の夜間監督者の仕事をしていたが、ボストン養成学校設立にいたって、その校長として赴任した。その後に、日本からの看護師の教育者としての要請に応じた。
- 156) 中村栄助 (1849-1938)；京都商家の生まれ。新島襄の大学設立に賛同し、新島に対する敬愛と信頼の念が深い中村は、資金集めに奔走するなど設立に向けて協力すると同時に、財政面から大学が窮地に陥るたびに、その困難を乗り切る為に全力を尽くした。
- 157) 内村鑑三の不敬事件；1891年（明治24年）、2月9日の能仁新報には内村教授の不敬事件を取りあつかっている。「第一高等中学校教授内村鑑三氏は、此程同校に於いて勅語奉讀式を行いたる節敬礼を行わざりしより、同校中に大紛紜を生じ、遂に此程教授の任を解かれたり。」
- 158) 井上哲次郎 (1855-1944)；日本哲学、道德教育論の先駆者。
- 159) 井上哲次郎著；内地雜居論、朝野新聞、1891年（明治24年）4月2日付け。



- 160) ヘレン・E. フレーザー (Helen E. Fraser)；ベルビュー病院看護婦学校の卒業生。1891年（明治24年）から来日し、京都看病婦学校の看護教師として1896年（明治29年）帰国。1905年（明治38年）宣教師デビスと結婚した。在日期間1891年1月－1896年。
- 161) Helen E. Fraser (1896), 近藤恒有訳, 坪井良子編；近代日本看護名著集成,『実用看護法』, 大空社, 1988年
- 162) メリー・フロレンス・デントン (Mary Florence Denton 1857-1947)；デントンは1888 (明治21) 年, 31歳で来日。同志社女学校の充実に尽力した。1947 (昭和22) 年に永眠するまでの59年間, 第2次世界大戦中も帰国せず女子部構内に居住し, 同志社のために働いた。女性宣教師として創設期の同志社女学校に着任したのは8人目であったが, 女子部のどの宣教師よりも長く, そして恐らくどの宣教師よりも熱烈に同志社と日本を愛したとされる。
- 163) 佐伯理一郎著；前掲書153)。
- 164) 宣教師総辞職事件；1896年（明治29年），アメリカン・ボード派遣の同志社宣教師全員が辞職し，新島襄以来同志社とアメリカン・ボードとの間に成立していた関係が決裂・断絶した事件。直接の発端は1895年（明治28年）アメリカン・ボード派遣の委員と同志社側委員との間に京都の宣教師館の帰属と使用権，同志社病院，京都看病婦学校の管理権，同志社のキリスト教主義教育について協議が始められたことに起因する。同志社側は従来行われてきたアメリカン・ボードからの寄付と教員の派遣を謝絶することを基本として交渉に臨み，決裂した。その結果，総辞職となった。
- 165) 文部省編；学制百年史，p34，帝国地方行政，1972年。
- 166) ビルロート (Christian Albert Theodor Billroth 1829-1894)；ドイツの有名な外科医。胃腸の手術における先駆者。ビルロート法という胃切除術が現在でも残っている。
- 167) 佐伯理一郎著，坪井良子編；普通看病学，日本看護名著集成3巻，日本看護協会出版会，1988年。
- 168) 大日本婦人衛生会編；婦人衛生雑誌，大空社，1990年。
- 169) 佐伯理一郎著；患者の特異性及び看護婦の監督に関するナイチンゲール女史の訓戒，衛生学雑誌，pp21-26，1901年。
- 170) 佐伯理一郎著；京都同志社病院内看病婦学校訓書，衛生学雑誌，pp25-27，1902年。
- 171) 大日本婦人衛生会；発起人荻野ぎん子，岡田美寿子，松浦里，鈴木まさ子などの医療関係者によって設立された。その目的は『衛生学雑誌』第一号（明治21年3月発行）の私立日本婦人衛生会趣意書に示されたように，健康的な生活を送るための日常生活上の衛生，すなわち，衣服の洗浄法，食物の調理法，看病法，育児法などについて女性たちに意識啓蒙するためである。本会は徐々に衰退したようで，機関紙である『衛生学雑誌』も1916年（大正15年）の382号で終了している。
- 172) 鈴木まさ (1857-1940)；静岡県士族加藤信盛の長女として生まれた。横浜のフェリス・セミー（現在のフェリス女学校）に学んだ。夫は西南の役に大隊長として活躍した鈴木良光陸軍歩兵少佐であったが，仙台の陸軍病院で病死した。夫の死後，桜井女学校付属看護婦養成所に入学。卒業後は東京帝国大学医学部附属医科大学第一医院の内科婦長として勤務した。
- 173) 佐伯理一郎著；日本女科史，大学堂書店，1972年。
- 174) 富士川游 (1865-1940)；広島県出身の医師，哲学者，医学史の研究者。人の精神性を宗教的な立場から論じた宗教学者であり，教育者でもあった。1881年（明治14年）広島県病院付属医学校で医学を学び，1897年（明治30年）芸備医学会を呉秀三，尼子四郎，三宅良一らと共に設立，『芸備医事』を創刊した。1898年（明治31年），ドイツに留学し，1900年（明治33年），ドイツのイエーナ大学よりドクトル・メディテーネ (Doctor・Medicine) 学位を取得した。
- 175) 佐々木秀美著；わが国における小児精神医療のパイオニア富士川游の生涯とその思想，看護学統合研究，Vol.9 No.2，pp1-14，2009年。
- 176) 佐々木秀美著；小児精神医療のパイオニア富士川游の看護観，看護学統合研究，Vol.11，No.1，pp37-49，2010年。
- 177) 同志社史料編集所；同志社90年史，同志社，1965年。
- 178) 同志社史料編集所；新島襄その時代と生涯，同志社，1993年。

- 179) 佐伯理一郎著；前掲書153)。
- 180) John C. Berry (September 20, 1886), Training Schools for Nurses, Seikai Journal, 1887.
- 181) 森有礼 (1847-1889)；薩摩藩士。上野景範に英学を学び、イギリス・アメリカに留学。第一次伊藤内閣の時に初代文部大臣となり、学校制度の改正を行う。また私財により商法講習所（現在の一橋大学）を設立した。
- 182) 尊王攘夷運動；江戸時代末期に行われた反幕府運動。天皇を尊び、外国勢力を追い払うという意味。
- 183) 榎村正直 (1834-1896)；第二代京都府知事。1868年（明治元年）から一年間にわたる首都を東京に移すということは、京都に大打撃を与えた。維新早々に政府から派遣された大参事の主要任務は京都の速やかな復興であった。
- 184) 山本覚馬 (1828-1892)；会津藩士山本権八の長男。新島襄らの同志社創立に協力した。妹は新島襄の妻八重。
- 185) ジェローム・ディーン・デビス (Jerome Dean Davis 1838-1910)；アメリカン・ボードの宣教師。彼は新島襄の学校教育構想に賛同し、協力した。在職中、同志社理事にも就任。神学校では教授として組織神学を講じて日本にキリスト教神学を移植する上に大きな足跡を残した。
- 186) 同志社史料編集所；前掲書177), p367.
- 187) 同志社史料編集所；前掲書177), p245.
- 188) 中山泰昌編集；明治編年史, p276, 1970年.
- 189) John C. Berry (September 20, 1886), Training Schools For Nurses, p29, seikai Journal. 1887.
- 190) プリングル (Miss Pringle 1846-1920)；ナイチンゲールの愛弟子の一人。ナイチンゲール看護学校卒業後、エジンバラ看護学校に赴任して看護の教育に関わった。ナイチンゲールはプリングルのことをパール「真珠」と呼んで特にかわいがったとされる。クック伝『ナイチンゲールその生涯と思想一』
- 191) 尾田葉子訳；リンダ・リチャーズ回想記, p44, 看護の科学, 1976年.
- 192) 同志社史料編集所；前掲書177)。
- 193) アニタ・ニューカム・マギー (Anita Newcomb McGee)；父親はサイモン・ニューカムであり、東京帝国大学における天文学上で幾分かの貢献をした。当時はジョン・ホプキンス大学で天文学の教授。北里医学博士、穂積法学博士などが加盟している万国医学術学会の会長である。母親は米国海軍軍医の娘。マギー女史は23歳のときに大学教授のマギー博士と結婚、結婚後にワシントンで医学を修めた。(広島日刊中国 1903年（明治37年）8月26日付け。
- 194) 佐伯理一郎著；前掲書153), p40.
- 195) 日露戦争；日英同盟で南下してくるロシアとの間に引き起こされた戦争。
- 196) 佐伯理一郎著；前掲書153), p43-55.
- 197) 佐伯理一郎著；前掲書153), p58.
- 198) Lavinia Loyd Dock, A History of Nursing, Volume IV (1907), pp256-277, The Heritage Press, 1974.
- 199) メアリー・アデレード・ナッティング (Mary Adelaide Nutting 1858-1948)；カナダのケベック出身。ロブの監督するジョン・ホプキンス看護学校の第一期生。ロブの後を受けて同校の校長となった後、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの病院管理コースの家庭管理（後に看護師教育）の教授になった。著作に『History of Nursing』がある。
- 200) ラビニア・ロイド・ドック (Lavinia Loyd Dock 1858-1956)；ニューヨーク、ヘンリー・ストリート・セツルメントの看護婦であり、女性の社会的地位の向上に貢献した。社会福祉運動を展開した看護史上偉大な人物として評されている。
- 201) リリアン・ウォルド (Lillian Wald 1867-1940)；マウントホリオーク・カレッジから法学博士を受けた看護婦。ヘンリー・ストリート・セツルメントの所長として人々の状況改善に努めたほか、福祉政策他連邦の児童局の発足に尽力した。
- 202) リリアン・ウォルド著、阿部里美訳；ヘンリー・ストリートの家、日本看護協会出版会、2004年。
- 203) Josephine A. Dolan (1973), Nursing in Society (小野泰博他訳；看護。医療の歴史, p 305, 誠信書



- 房, 1978年.)
- 204) Josephine A. Dolan (1973); 前掲書203).
- 205) デイジー・カロリン・ブリッジズ著, 小林富美英他訳; ICN の歴史, 日本看護協会出版会, 1977年.
- 206) イザベル・スチュワート (Isabel Stewart); カナダ生まれ. ウニィベグ総合病院で看護婦の資格を得る. 後にコロンビア大学教員養成大学に通い, 卒業後, ナッティングの助手となる. 1923年准教授となった. ナッティング引退後, 彼女の後継者となった.
- 207) Lavinia L. Dock & Isabel Stewart, A Short History of Nursing, G. P. Putnam's sons, 1938.
- 208) 杉田暉道他著; 前掲書3), p141.
- 209) Mary Adelaide Nutting & Lavinia L. Dock, A History of Nursing (1907), Thoemmes Press, 2000.
- 210) Mary Adelaide Nutting & Lavinia L. Dock; 前掲書209), pp276-277.
- 211) 熊本日新聞; 前掲書127).
- 212) Florence Nightingale (1860), Note on Nursing, pp188-189, Scutari Press, 1992.
- 213) 阿知波五朗著; 看護学は学として成り立ちうるか, 看護教育, Vol.16, No.9, p556, 1975年.
- 214) 熊本日新聞; 前掲書127).
- 215) 佐伯理一朗著, 坪井良子編; 普通看病学, p2, 日本看護名著集成3巻, 日本看護協会出版会, 1988年.
- 216) 佐伯理一朗著; 前掲書213), pp1-2.
- 217) Florence Nightingale (1860); Note on Nursing, p15, Scutari Press, 1992年.
- 218) Florence Nightingale (1888); 前掲書117), p428.
- 219) Zachary Cope (1958); 前掲書81), p170.
- 220) Florence Nightingale (1892), Remarks on a Register for Nurses (金井一薫他訳; 看護婦登録制度についての意見書—王立英国看護婦協会への見解への反論, pp34-35, 総合看護, Vol.1, 1987年.
- 221) 佐々木秀美著; ナイチンゲールと看護教育—その教育目的へのアプローチ, 看護教育, Vol.36, No.1, pp67~71, 1995年.
- 222) Mary Poovey, Florence Nightingale, Cassandra/Suggestions for Thought, p95, Pickering & Chatto Limited, 1991.
- 223) Florence Nightingale (1858), Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals, (湯楨ます他訳; ナイチンゲール著作集第一巻, 女性による陸軍病院の看護, p41, 現代社, 1985年.)
- 224) 下中弘編; 哲学辞典, 平凡社, p1413-1414, 1997年.
- 225) マルクス主義的思想; マルクスとエンゲルスから出発して展開された思想. 哲学の領域における弁証法的唯物論乃至史的唯物論, 経済学の領域におけるマルクス経済学を中心とした哲学的・社会学的理論に基づく科学的社会主義を主張する.